

HIROSE
広瀬遺跡 1

—広瀬遺跡第1次調査1—

2005

福岡市教育委員会

福岡市

HIROSE

広瀬遺跡 1

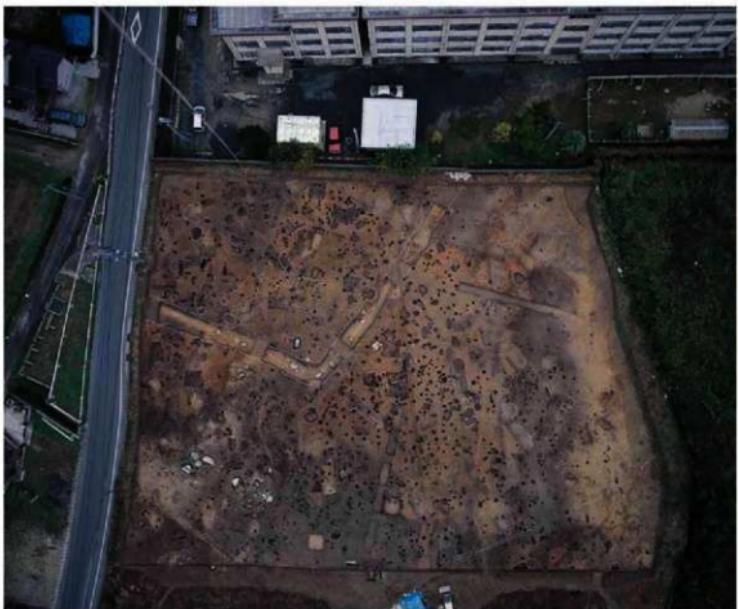
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第865集



調査番号 0326
調査略号 HRS-1

2005

福岡市教育委員会



1. 1区全景（南西から）



2. G9グリッド縄文土器出土状況（北から）



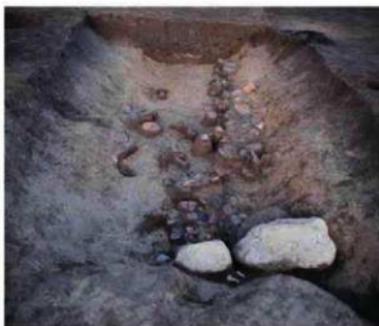
3. G9グリッド出土縄文土器



1. 土器焼成爐SK11（北から）



2. SK11断面（北から）



3. SD01土器祭祀（西から）

序

福岡市西部の早良平野は、平野を北流して博多湾に注ぐ室見川の流域を中心として旧石器時代から近世までの多くの遺跡が形成され、豊かな自然と多くの遺跡が残された地域です。

福岡市ではまちづくりの目標の一つとして海と歴史を抱いた文化の都市を掲げその実現にむけ邁進しています。しかし快速な都市づくりをめざす一方で、これにともなって消滅していく遺跡も多く、本市ではこれら開発によってやむなく失われる遺跡の記録保存調査を行なっています。

本書は早良区石釜地区的圃場整備事業に伴い、平成15年度に発掘調査を行なった広瀬遺跡第1次調査の成果を報告するものです。

調査の結果、広い交流を示す多くの縄文土器と、内野・石釜地区で中心となる中世居館の検出、本市で2例目となる中世土器焼成遺構の検出など多くの成果を上げることができました。

本報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献することができましたならば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本報告書の作成にいたるまで多大なご協力を頂いた農林水産局・石釜圃場整備組合・地元関係者の方々に対し、心よりの感謝の意を表します。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　　言

1. 本書は、石釜地区基盤整備促進事業に伴い発掘調査を実施した、福岡市早良区大字西・内野8丁目地内に所在する広瀬遺跡の第1次調査第1区～3区の調査報告書である。遺物編は平成17年度刊行予定「上広瀬遺跡1」に併載する予定である。
2. 発掘調査は、平成15年度（2003）、福岡市教育委員会が実施した。
3. 調査で検出した各遺構は、土壙（SK）、溝状遺構（SD）、掘立柱建物（SB）、柱穴（SP）、他（SX）の様に頭に記号を付して呼んだ。
4. 本書に掲載した遺構実測図は、加藤良彦・瀬戸啓治・藤野雅基・山田ヤス子・天野玄普による。
5. 本書に使用した図面類の整図および製図は、加藤の他に井上加代子・安野　良・畠田則子・名取さつき・遠藤茜で行った。
6. 本書に使用した遺構写真は加藤が、全景等空中写真は有限会社空中写真企画による。遺物写真はフォトハウスOKAによる。
7. 本書に使用したグリッド剖面は現地剖面に合わせ任意に5m方眼で設定し、呼称は北西交点とした。縦軸（アルファベット）は旧国土座標第2系による座標北より $56^{\circ} 33' 22''$ 西偏する。方位は座標北である。磁北はこれに $6^{\circ} 10'$ 西偏する。
8. 付録の広瀬遺跡第1次調査に伴う自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。
9. 土器焼成窯SK11の型取りは福岡市埋蔵文化財センター、比佐陽一郎・片多雅樹氏に委託し、レプリカ作製は有限会社ふりいはんどに委託した。
10. 本書の執筆・編集は、加藤が行った。
11. 本書に収録された遺物・土器焼成窯レプリカ・写真・図面などの記録類は、平成17年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

I. はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	1
II. 調査区の立地と環境.....	3
III. 調査の記録.....	6
1. 調査の概要.....	6
2. 1区の調査	7
1) 繩文時代の調査	9
2) 中世の調査	24
3) 近世の調査	42
3. 2区の調査	47
1) 繩文時代の調査	47
2) 中世の調査	48
4. 3区の調査	49
1) 繩文時代の調査	52
2) 弥生時代の調査	53
3) 中世の調査	53
IV. 小結.....	54
付編. 広瀬遺跡第1次調査に伴う自然科学分析	57

挿 図 目 次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000).....	4
Fig. 2	調査区位置図 (1/2,000)	5
Fig. 3	1区遺構全体図 (1/200)	折り込み
Fig. 4	縄文時代遺構分布図 (1/400)	8
Fig. 5	SK54・56実測図 (1/40)	9
Fig. 6	SK10・33・66・71・72・83実測図 (1/40)	11
Fig. 7	SK38・39・40・48・69実測図 (1/40・38・40-1/60)	15
Fig. 8	B7・D4・E6・E8・E9・E11縄文調査グリッド実測図 (1/50)	18
Fig. 9	G9・10・J10縄文調査グリッド実測図 (1/50)	21
Fig. 10	K8・L9縄文調査グリッド実測図 (1/50)	23
Fig. 11	中世遺構分布図 (1/400)	25
Fig. 12	SD01陰檻部・土層断面実測図 (1/40・1/80)	26
Fig. 13	SBO1実測図 (1/80)	27
Fig. 14	土器焼成場SK11実測図 (1/30)	28
Fig. 15	SK01・27・86実測図 (1/40)	29
Fig. 16	焼土塙SK15・20・26・30・43・45実測図 (1/40)	31
Fig. 17	焼土塙SK58・65・67・80・81・57実測図 (1/40)	34
Fig. 18	焼土塙SK03・13・29・59実測図 (1/40)	38
Fig. 19	焼土塙SK25・44・79実測図 (1/40)	41
Fig. 20	近世遺構分布図 (1/400)	43
Fig. 21	鹿石塙SK31・41・46・55実測図 (1/40)	44
Fig. 22	2区遺構全体図 (1/200)	47
Fig. 23	縄文調査グリッド・SK01実測図 (1/40)	48
Fig. 24	3区遺構全体図 (1/200)	49
Fig. 25	3区遺構・縄文調査グリッド実測図 (1/40・05-1/60)	50

写 真 目 次

Ph. 1 調査前風景（西から）	2	Ph.38 SD01土層断面（F6北から）	24
Ph. 2 I区遠景（南から）	6	Ph.39 SD01土層断面（B11西から）	24
Ph. 3 SK54土層断面（東から）	9	Ph.40 SD01陸橋部（北から）	24
Ph. 4 SK54完掘状況（東から）	9	Ph.41 SD01祭祀跡（西から）	24
Ph. 5 SK56土層断面（北から）	10	Ph.42 SD01・C10中国陶器出土状況	26
Ph. 6 SK56完掘状況（北から）	10	Ph.43 SB01全景（南から）	26
Ph. 7 SK56内面（西から）	10	Ph.44 SK11焼成面内土層断面（北から）	27
Ph. 8 SK10全景（北から）	10	Ph.45 SK11土器焼成面（北から）	27
Ph. 9 SK33土層断面（西から）	11	Ph.46 SK11土器焼成面（東から）	28
Ph.10 SK33全景（西から）	11	Ph.47 SK11焼成面断面（北から）	28
Ph.11 SK33土器出土状況（南西から）	12	Ph.48 SK11型取り作業（箱押し）	29
Ph.12 SK66全景（東から）	12	Ph.49 SK11型取り作業（シリコン塗布）	29
Ph.13 SK72全景（東から）	12	Ph.50 SK11型取り作業（シリコン塗布）	29
Ph.14 SK83全景（北から）	12	Ph.51 SK11型取り作業（裏打ち）	29
Ph.15 SK71全景（東から）	13	Ph.52 SK01全景（南から）	29
Ph.16 SK71石器出土状況（東から）	13	Ph.53 SK15土層断面（北から）	30
Ph.17 SK38全景（北から）	14	Ph.54 SK15全景（北から）	30
Ph.18 SK48全景（東から）	14	Ph.55 SK30全景（南から）	32
Ph.19 SK39土層断面（東から）	16	Ph.56 SK45土層断面（南から）	32
Ph.20 SK39全景（東から）	16	Ph.57 SK45全景（南から）	32
Ph.21 SK40全景（東から）	16	Ph.58 SK43全景（南西から）	33
Ph.22 SK69全景（東から）	16	Ph.59 SK20全景（北から）	33
Ph.23 B7グリッド土器出土状況	17	Ph.60 SK26土層断面（東から）	33
Ph.24 D4グリッド集石（南から）	17	Ph.61 SK26全景（南から）	33
Ph.25 E6グリッド集石炉（南東から）	19	Ph.62 SK58全景（北東から）	36
Ph.26 E8グリッド土器出土状況	19	Ph.63 SK80全景（東から）	36
Ph.27 E9グリッド土器出土状況	20	Ph.64 SK81全景（北から）	37
Ph.28 E11グリッド土器出土状況	20	Ph.65 SK85全景（南から）	37
Ph.29 G10グリッド土器出土状況	22	Ph.66 SK03全景（北から）	38
Ph.30 G9グリッド土器出土状況	22	Ph.67 SK13全景（南から）	38
Ph.31 G9グリッド押型土器出土状況	22	Ph.68 SK29土層断面（北から）	39
Ph.32 K8グリッド全景（東から）	23	Ph.69 SK29全景（北から）	39
Ph.33 K8グリッド石核出土状況	23	Ph.70 SK59土層断面（北から）	39
Ph.34 L9グリッド全景（東から）	23	Ph.71 SK59全景（北から）	39
Ph.35 L9グリッド土器出土状況	23	Ph.72 SK25検出状況（北東から）	40
Ph.36 SD01土層断面（F3南から）	24	Ph.73 SK25全景（北東から）	40
Ph.37 SD01土層断面（E9西から）	24	Ph.74 SK44全景（南から）	42

Ph.75	SK79全景（東から）	42	Ph.85	3区全景（南東から）	51
Ph.76	SK31全景（北から）	45	Ph.86	SK01全景（南から）	52
Ph.77	魔石土壙群（南から）	45	Ph.87	SK02全景（南から）	52
Ph.78	SK46全景（北から）	46	Ph.88	SK04全景（南から）	52
Ph.79	SK41全景（北から）	46	Ph.89	SK03全景（南から）	52
Ph.80	SK55全景（南から）	46	Ph.90	Ab5縄文調査グリッド（南から）	53
Ph.81	2区全景（南西から）	47	Ph.91	Ae5縄文調査グリッド（南東から）	53
Ph.82	縄文調査グリッド（南から）	48	Ph.92	Ae5土器出土状況（東から）	53
Ph.83	SK01全景（南から）	48	Ph.93	Ae5土器出土状況（南から）	53
Ph.84	2・3区全景（東から）	51			

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本遺跡の本格的調査の開始は、平成13年（2001）年9月20日付で計画が明らかとなった「石釜地区基盤整備促進事業」の施工を契機とする。受付番号は13-1-557である。埋蔵文化財課と農林水産局農林部農業土木課は、この事業計画について遺跡遺存の状況を把握するための試掘調査などの必要な事項について事前の協議を進めた。当初の事業計画は、総対象面積24.5haで、平成15年度から平成18年度にかけ順次整備していく計画であった。

これを受け埋蔵文化財課では初年度施工予定地の大半に広瀬遺跡が含まれる事を確認し、平成14年12月16日から12月26日まで初年度施工予定地全域に試掘調査を実施した。結果遺跡地内全域で焼土塙・柱穴をはじめとする中世の遺構と绳文時代の包含層を確認した。

この結果を受け両者の協議により、遺跡の包蔵地内には盛土による設計変更を行って保存する方針で調整を進めたが、やむを得ず遺構面が掘削される部分・道路・水路等の施工箇所については発掘調査を実施することになった。調査区は7箇所に分散し、東西約450m・南北約80mの長大な範囲に点在する（Fig.2）。

発掘調査は最大面積の調査1区から平成15年6月16日に着手し、同年12月26日に全ての行程を終了した。

調査番号	0326	遺跡略号	HRS-1
調査地地籍	早良区大字西、内野8丁目	分布地図番号	早良17（内野）0800
開発面積	35,000m ²	調査実施面積	6,243m ²
調査期間	030616～031226	事前審査番号	13-1-557

2. 調査の組織

【調査委託】農林水産局農林部農業土木課（当時）

【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 生田征生（当時）

【調査総括】文化財部長 境徹（当時） 埋蔵文化財課長 山崎純男（当時） 調査第1係長 力武卓治（当時）

【調査庶務】文化財整備課 後藤泰子

【発掘調査】加藤良彦

【発掘作業】菊地栄子 鶴田喜美恵 中園登美子 山田ヤス子 岩見敬子 鶴田佑子 天野玄普

伊東綱子 脇山千代美 中園輝夫 岩見美津代 岩崎道雄 岩崎すみ江 菅野武
尾崎泰正 川嶋京子 貴田潔 森下初美 真田弘二 実岡恵護 小出敏幸 竹末敏伸
友池敏夫 佐藤信二 吉川武 本袋茲宣 藤野雅基 濑戸啓治 下司昭枝 井上八郎
上野道郎 柴田勝子 吉川春美 指山歌子 門司弘子 堀川ヒロ子 廣瀬栄 永嵐重後
阿比留忠義 平井和子 海津宏子 有江笑子 金子由利子 安河内史郎

【整理作業】芦馬恵美子 木村厚子 国武真理子 竹田幸子 平川泰世



Ph.1 調査前風景（西から）

II. 調査区の立地と環境

福岡市域は西から、背振山系から北流する諸河川流域である糸島・早良・福岡平野、犬鳴山地から北西に流れる諸河川流域である柏屋平野が主要な部分を占め、これらが博多湾を囲むように広がっている。

広瀬遺跡が位置する早良平野は、西側を背振主稜から北に派生した西山・飯盛・高祖地星山地に、東を同じく北に派生する油山山地と更に北に延びる飯倉台地によって画され、中央部を背振山地を源流とする室見川が北流し博多湾へと注いでいる。平野の北辺には姫浜をはじめとする第三紀層の小丘陵群が散在し、これらを繋ぐように砂丘が形成され、後背には沖積低地が広がっている。また両山地の山麓部や平野中央部には中位段丘下位砂礫面が残され、小田部台地にはこの上位の火山灰層が残存している。低位段丘の多くは室見川の扇状地平野・三角州平野部に埋没している。この下流域には西新町遺跡・藤崎遺跡・有田遺跡等、中流域には吉武遺跡群・浦江遺跡・金武城田遺跡・重留遺跡・東入部遺跡群等弥生から中世を中心とする集落遺跡が展開している。

広瀬遺跡は、これらから遠く離れた背振山麓に近い、室見川上流域右岸の河岸段丘上に立地する。南北を河川に開析され、北東に延びる舌状台地となっており、調査区は遺跡の北東部に位置する。標高は78m～89mである。遺構は耕作土下の黄褐色・黒灰色シルトの縄文時代早期～晚期包含層上面で検出される。

上流域の歴史環境を概観してみると、中・下流域と異なり中心となるのは旧石器・縄文時代・中世で、旧石器時代は峯遺跡でスクレイパー等が、馬立山遺跡でナイフ型石器・尖頭器、脇山A遺跡群で細石核・三稜尖頭器、志水A遺跡でナイフ型石器が出土している。

縄文時代は脇山A遺跡群・脇山B遺跡群・栗尾B遺跡等で早期から晩期に至るまとまった資料が出土している。

弥生時代以降は遺跡は希薄で、谷口遺跡で弥生時代の遺構がわずかに、古墳時代では室見川左岸西山山麓の内野古墳群・室見川右岸荒平山山麓の荒平古墳群I群を最南端として、この狭隘部以南では1基の古墳も造営されず空白地帯となっており人跡未踏の觀がある。

古代では峯遺跡群で掘立柱建物が検出される。集落が形成されるのは12・13世紀以降で、峯遺跡群・脇山A遺跡群・内野遺跡群で多くの貿易陶磁器と掘立柱建物群・土塙墓群を検出している。文献では当該地は中世背振上宮東門寺と博多聖福寺の寺領となっており、これらを背景とした開墾を裏付けている。

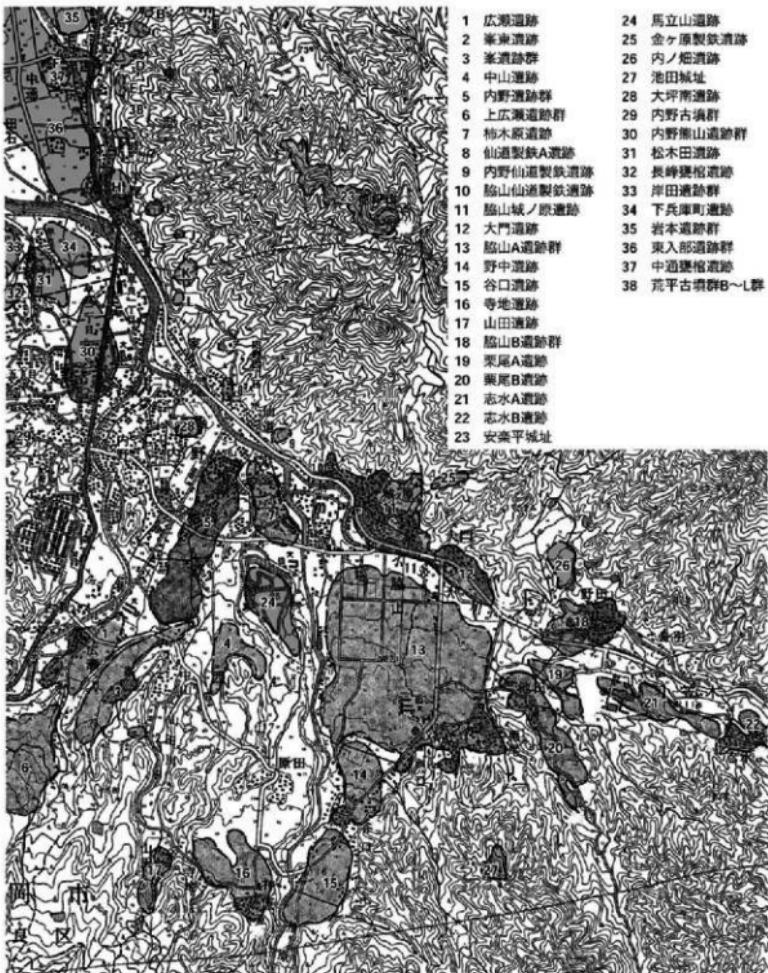


Fig.1 周辺道路分布図 (1/25,000)

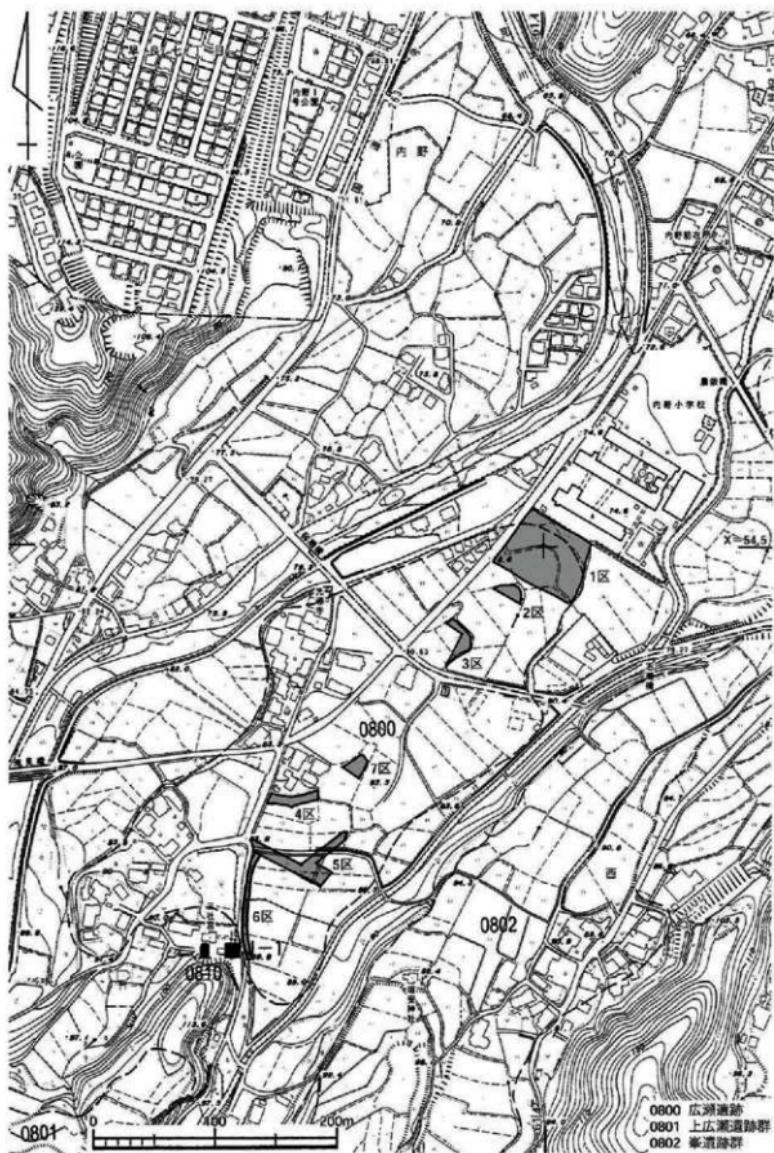


Fig.2 調査区位置図 (1/2,000)

III. 調査区の記録

1. 調査の概要

本調査区は福岡市西部に位置する早良平野を貫流する室見川の上流部、東岸の河岸段丘上に立地する広瀬遺跡の北東部に位置する。標高は78m～89mである。遺構は耕作土下の黄褐色・黒灰色シルトの縄文時代早期～晚期包含層上面で検出される。

調査区は遺構面が掘削される部分・道路・水路等の施工箇所に設定され、東から1区3,491.5m²・2区145m²・3区355.5m²、市道を挟んでさらに7区346m²・4区390m²・5区961m²・6区558m² (Fig.2) の調査区を設定した。

検出した遺構は、1区で縄文時代の倒木痕47基・集石炉1基・貯蔵穴3基・土壙29基・柱穴・包含層、中世溝1条・焼土壙29基・土器焼成場1基・土壙10基・掘立柱建物1棟・柱穴多数、近世土壙4基・水田開墾時の廃石土壙8基・柱穴多数、2区で縄文時代の包含層、中世焼土壙1基・柱穴、3区で縄文時代の倒木痕16基・柱穴・包含層、中世溝1条・焼土壙1基・柱穴、4区で縄文時代の倒木痕1基・中世溝3条・焼土壙2基・土壙2基・倒木痕1基・柱穴、近世廃石土壙2基・柱穴、5区で縄文時代の倒木痕19基・土壙6基・柱穴・包含層、中世焼土壙8基・土壙8基・柱穴、6区で縄文時代の倒木痕18基・土壙1基・柱穴・包含層、中世溝2条・焼土壙2基・土壙1基・柱穴、近世土壙1基・廃石土壙1基・倒木痕1基、7区で縄文時代の倒木痕9基・中世焼土壙1基を検出した。総計で縄文時代の倒木痕110基・集石炉1基・貯蔵穴3基・土壙39基・柱穴・包含層、中世溝7条・



Ph.2 1区遠景（南から）

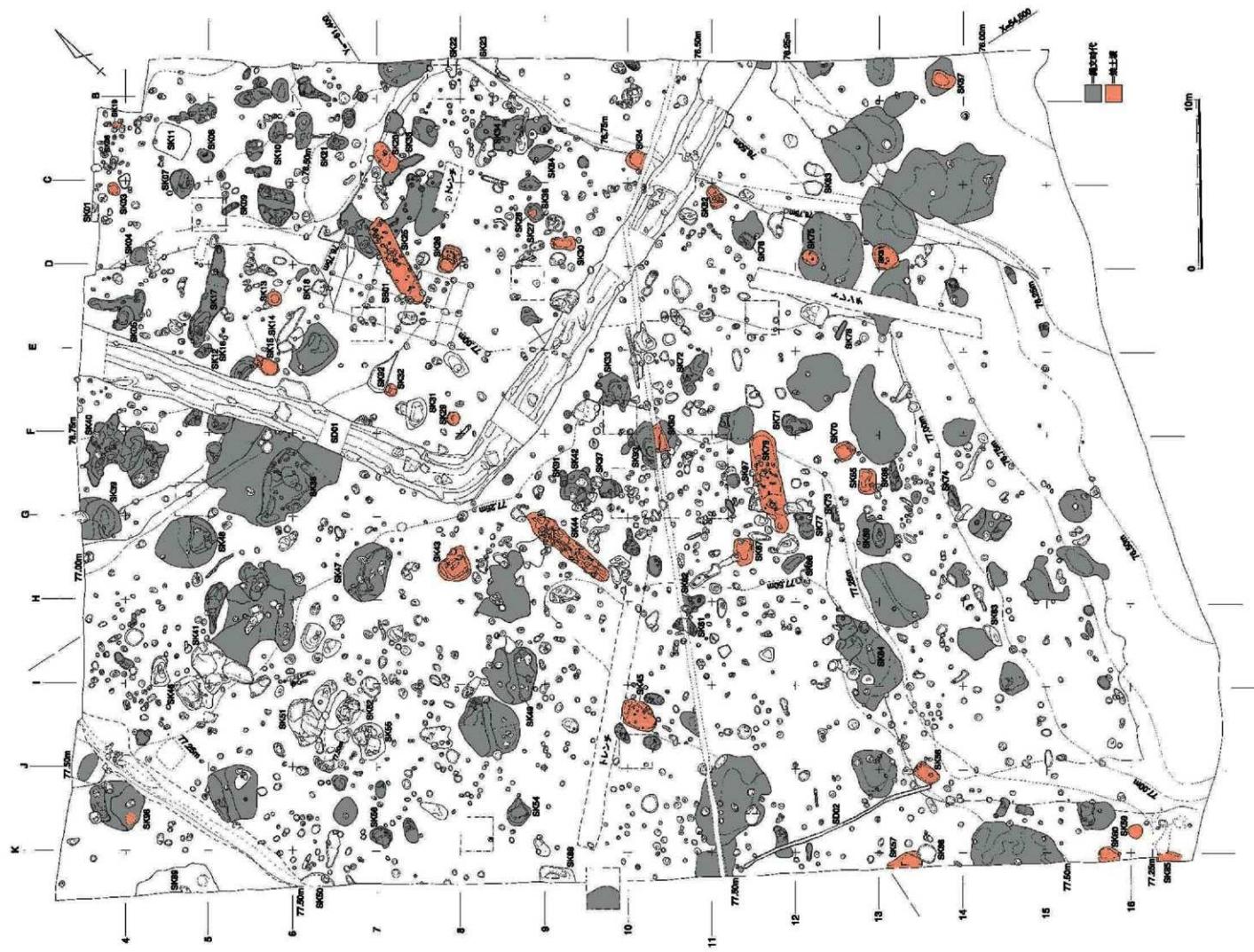


Fig.3 1#区综合剖面 (1/200)

焼土壙44基・土器焼成壙1基・土壙20基・掘立柱建物1棟・倒木痕1基・柱穴多數、近世土壙4基・水田開墾時の廃石土壙11基・溝1条・倒木痕1基・柱穴多數である。中心となるのは縄文時代早期・晚期と13世紀前後の中世である。

縄文時代早期・晚期は包含層・倒木痕を主にして遺物が検出される。中世・近世遺構の検出面の黄褐色～黄灰色シルト・暗灰褐色～黒灰色シルトが包含層となっており、遺構検出・掘削時に縄文土器を検出した地点を中心に2mグリッドを設定し、包含層内の遺物の検出を行った。また、薄い黄灰色シルトがきれて下層の黒灰色シルトに切れ替わっている面においては黄灰色シルトを覆土とした遺構・倒木痕が検出される。殊に倒木痕は、倒置して起き上がった土層が、薄い黄灰色シルト面では黒灰色シルトが、逆に黒灰色シルト面では黄灰色シルトが三日月状のコントラストで現れ非常に検出し易い状況であった。直径5m近い倒木痕を多數検出している。覆土の黄褐色・暗灰褐色シルトから早期田村・手向山式期と晚期黒川式期の土器が出土しており、大部分が縄文時代と考えられ、晚期まで、当該地が巨木が鬱蒼とならぶ森林であったことを示している。

他に目立つのは焼土壙で、44基を検出している。少量の土師器と縄文土器以外まとまった資料の出土が無く時期比定が難しいが、大半が古代から開発が始まる12世紀後半～13世紀初以前の所産と考えられる。

調査1区先端近くには12世紀後半～13世紀初の幅2.5m・一辺約50mと思われる方形区画溝が検出され、南辺の中央部に陸橋を設けている。内側には2×3間の掘立柱建物をはじめ多数の柱穴と土壙が検出され、内野・石釜地区での中心施設と考えられる。また、特筆すべきは2.3m×1.8m・深さ10cmの全面が火熱のため5～20mm程暗褐色に変色した隅丸方形皿状の土器焼成壙を検出したことである。焼成面から土師器壊・皿の破片数十片が出土している。

遺物は包含層を中心に、旧石器時代石器・縄文時代早期田村・手向山式期押型文土器・撚糸文土器・石鎌・石匙・中期漸戸内船元系土器・晚期黒川式土器・石器を、中世溝を中心に多くの土師器壊・皿・貿易陶磁器を検出している。

今回報告を行うのは市道から東の1～3区分である。

2. 1区の調査

調査第1区は本調査の中心となる調査区で、遺跡北東端部に位置する。調査面積3,491.5m²で、縄文時代の倒木痕47基・集石炉1基・貯蔵穴3基・土壙29基・柱穴・包含層・中世溝1条・焼土壙29基・土器焼成壙1基・土壙10基・掘立柱建物1棟・柱穴多數・近世土壙4基・水田開墾時の廃石土壙8基・柱穴多數を検出している。

縄文時代は、上部の黄褐色～黄灰色・暗灰褐色シルトが比較的厚く残る中央部を中心に早期田村・手向山式期押型文土器・撚糸文土器・石器・晚期黒川式土器・石器を検出している。黄灰色シルトがきれて下層の暗灰褐色～黒灰色シルトに切れ替わっている面においては黄灰色シルトを覆土とした遺構・倒木痕が検出され、倒木痕は径5m前後のものが中央の30×20m程の範囲を除いて密集している。

中世では北東部で12世紀後半～13世紀初の幅2.5m・一辺約50mと思われる方形区画溝が検出され、南辺の中央部に陸橋を設けている。内側には2×3間の掘立柱建物をはじめ多数の柱穴と土壙・土器焼成壙が検出され、内野・石釜地区での中心施設と考えられる。

近世では北西部に水田開墾時に巨石を埋め込み処理した廃石土壙を8基遺構検出している。

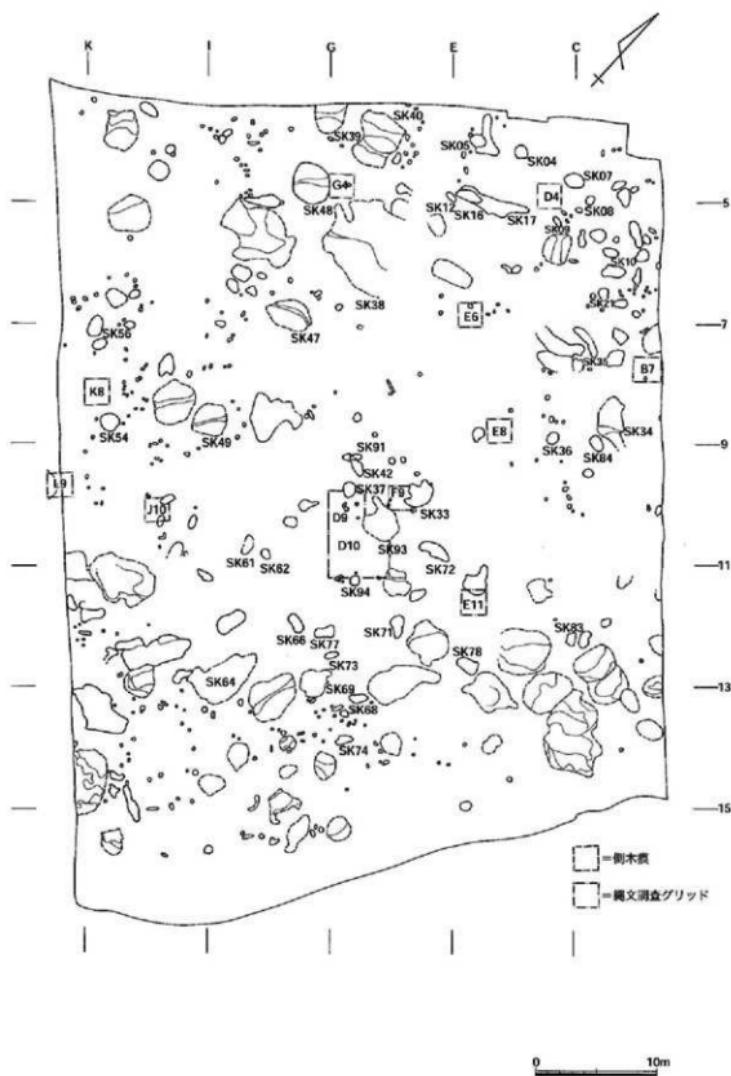


Fig.4 考文時代造構分布図 (1/400)

1) 縄文時代の調査

縄文時代は倒木痕47基・集石炉1基・貯蔵穴3基・土壙29基・柱穴・包含層を検出した。包含層は掘削時に地山から縄文土器を検出した地点を中心に2mグリッドを11箇所設定し、包含層内の遺物の検出を行っている。早期田村・手向山式期押型文土器・燃系文土器・石器・晚期黒川式土器・石器を検出している (Fig.4)。

(1) 貯蔵穴

貯蔵穴は南西部で2基 (SK54・56)、中央部で1基 (SK97) 検出した。SK54より粗製深鉢片を検出しておらず、晩期に属する可能性が高い。

SK54 (Fig.5 Ph.3.4) 調査区南西に位置する円形の貯蔵穴で、口径0.75×中端径1.7×底径0.9×深

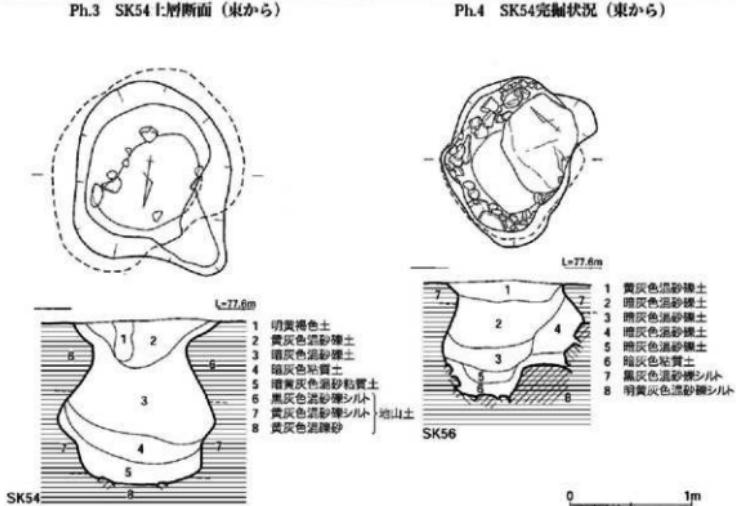
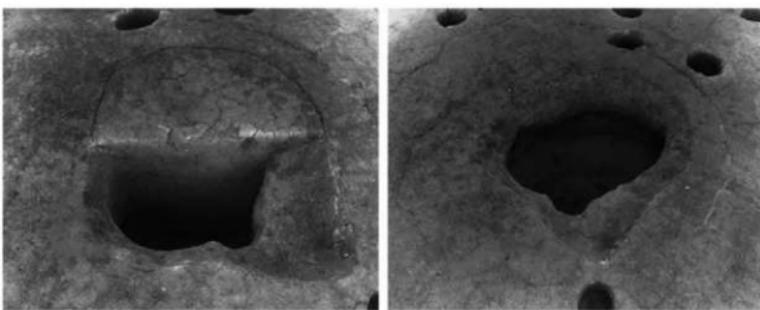
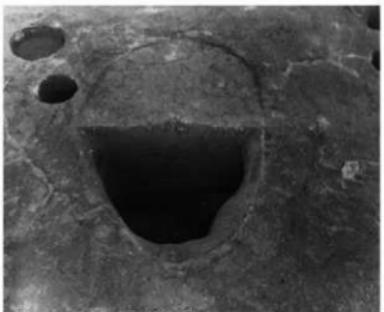


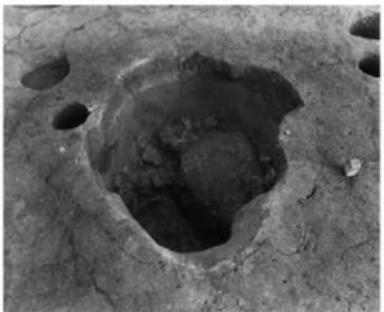
Fig.5 SK54・56実測図 (1/40)



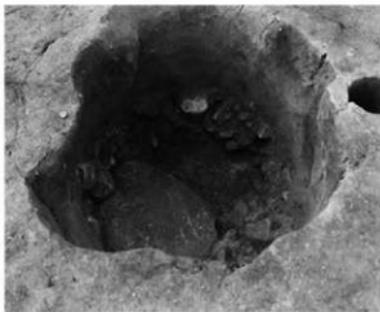
Ph.5 SK56土層断面（北から）

さ1.34mを測る。断面は上から15cm程でくびれ蓋受け状となり外方に40cm程突出する。80cm程下位で最大に広がり、底面は砂礫層まで掘削される。堆積は最大径部分まで粘質土が堆積し（5・4層）、上位まで埋め戻され（3層）、陥没後2層が堆積する。遺物は晩期粗製深鉢土器が出土している。

SK56 (Fig.5 Ph.5.6.7) SK54の西8m程に位置する円形の貯蔵穴で、口径1.1×中端径1.35×底径0.65×深さ0.97mを測る。断面は上から10cm程でくびれ蓋受け状となり、同様に20cm程外方



Ph.6 SK56完掘状況（北から）



Ph.7 SK56内面（西から）



Ph.8 SK10全景（北から）

に足掛かり状に突出する。70cm程下位で最大に広がり、底面は砂礫層を50cm以上掘削し、堆積は最下層に粘質土が堆積し（6層）、上位まで埋め戻され（5～2層）、客土が陥没後炭粒を含む1層土が自然堆積する。

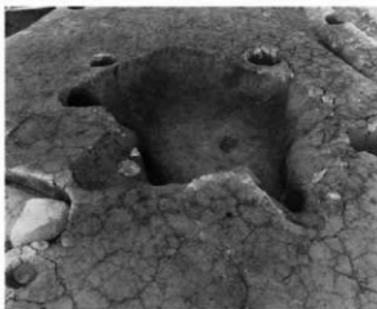
出土遺物は無く、植物遺体も検出されなかった。

(2) 土壌

土壤は調査区北から南の幅25m程の樹木痕の疎らな範囲で29基検出した。浅い事と、底面から逆茂木の検出もなく落し穴の可能性は



Ph.9 SK33土層断面（西から）



Ph.10 SK33全景（西から）

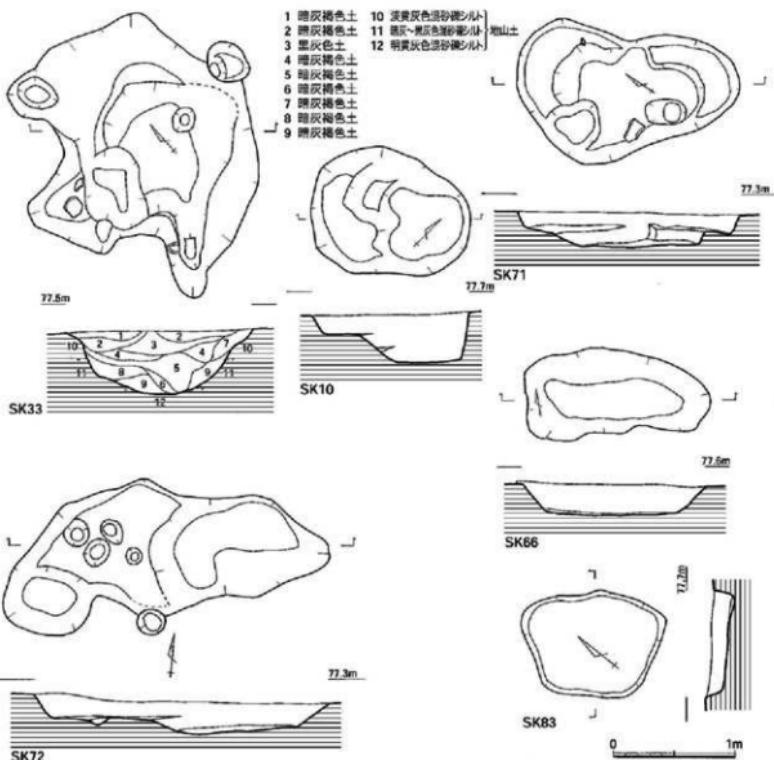
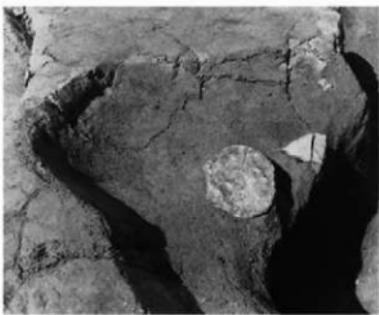


Fig.6 SK10・33・66・71・72・83実測図 (1/40)



Ph.11 SK33土器出土状況（南西から）

考えられず、性格は不明である。遺物の出土も少なく、SK33・66・71・72の4基で早期、SK10・12・16・17・35・62・76の7基で晩期遺物が出土している。早期はG10グリッド周辺に集中する。

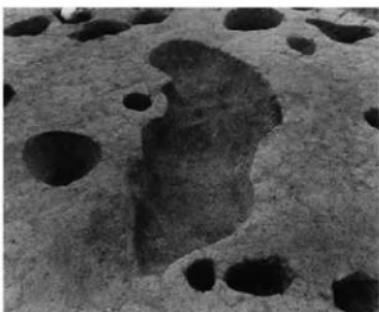
SK10 (Fig.6) 調査区北側の、土壤が集中するC5グリッドに位置する不整円形の土壤で、 $1.35 \times 0.95 \times$ 深さ $0.4m$ を測る。断面は3段の階段状をなす。調査区内で一番深く削平された田面にあり、70cmは低くなっている。内部からは晩期条痕文土器片を検出している。



Ph.12 SK66全景（東から）

SK33 (Fig.6 Ph.9.10.11) 調査区中央のF9グリッドに位置する不整形の土壤で、 $2.1 \times 1.8 \times$ 深さ $0.6m$ を測る。断面は船底状で7・8・9層と、南から地山壁の崩落した土が堆積する。倒木痕の可能性もある。突出した中端の床面に接して撚糸文土器片が検出される。

SK66 (Fig.6 Ph.12) 調査区中央のH11グリッドに位置し、早期の土器が集中するG10グリッドをはさんでSK33と対面する。不整長方形の土壤で、 $1.5 \times 0.65 \times$ 深さ $0.26m$ を測る。断面は船底状で灰褐色シ



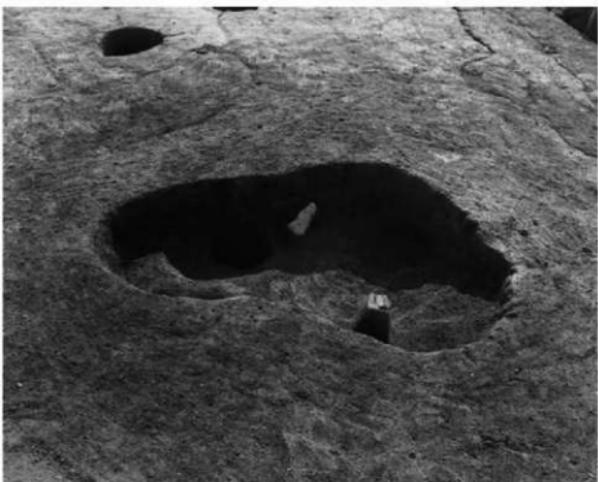
Ph.13 SK72全景（東から）



Ph.14 SK83全景（北から）

ルトが堆積する。土壤内から早期田村・手向山式期の撚糸文土器を検出した。

SK71 (Fig.6 Ph.15.16) SK66の北東8mのF11グリッドに、他の土壤とG10グリッドを囲むように位置する。不整長円形の土壤で、 1.8×0.95 深さ0.31mを測る。断面は2段の階段状で黄褐色シルトが堆積する。土壤内の床面から約25cm浮いた状態で早期のサヌカイト製横型石匙1点と焼石を検出した。



Ph.15 SK71全景（東から）

SK72 (Fig.6 Ph.13)
SK71の北7mのF10グリッドに、同様にG10グリッドを囲むように位置する。不整長円形の土壤で、 2.7×0.95 深さ0.34mを測る。断面は2段の浅い階段状で灰褐色シルトが堆積する。土壤内からは田村式期の梢円押型文土器が出土した。



Ph.16 SK71石匙出土状況（東から）

SK83 (Fig.6 Ph.14)
調査区東側のD12グリッドに位置し、深く削平された田面にあり、70~80cmは低くなっている。方形の土壤で、 1.15×0.85 深さ0.23mを測る。断面は逆台形で床は平坦。黄褐色シルトが堆積する。土壤内からは早期のサヌカイト製の石鍬が出土した。

(3) 倒木痕

倒木痕は、径5m前後の47基が、中央の30×20m程の南北方向の範囲を除いて密集している(Fig.4)。この倒木痕の空隙地に早期土器と土壌の集中部があり、歴代、巨木が育たない程度に伐開が繰り返され、活用された範囲であった可能性が有る。

倒木痕は倒置して起き上がった土層が、上層の薄い黄灰色シルト面では黒灰色シルトが、逆に黒

灰色シルト面では黄
灰色シルトが三日月
状のコントラストで
現れ非常に検出し易
い状況にあった。

また、覆土の堆積
方向が丘陵稜線と直
交方向を示すもの
が多い。遺跡周辺の地
形は金山と西山に挟
まれた野河内渓谷に
つながる南東方向に
聞く大きな谷の中に
あり、冬の北西の強
風が吹き込む風の通
り道となっており、
戦後暫くまでは強風
のため二階家が建て
られなかったといわ
れる地域であり、倒
木の方向はこの谷方
向に一致するもの
が多い。47基中、遺物
を検出したものは
SK39・40・64・
69・93の5基で、
SK40から早期の石
器が出土した以外は
晩期土器であり、晩
期の占める率が高
い。



Ph.17 SK38全景（北から）



Ph.18 SK48全景（東から）

SK38 (Fig.7 Ph.17)
調査区西側のG5グ
リッドに位置する、

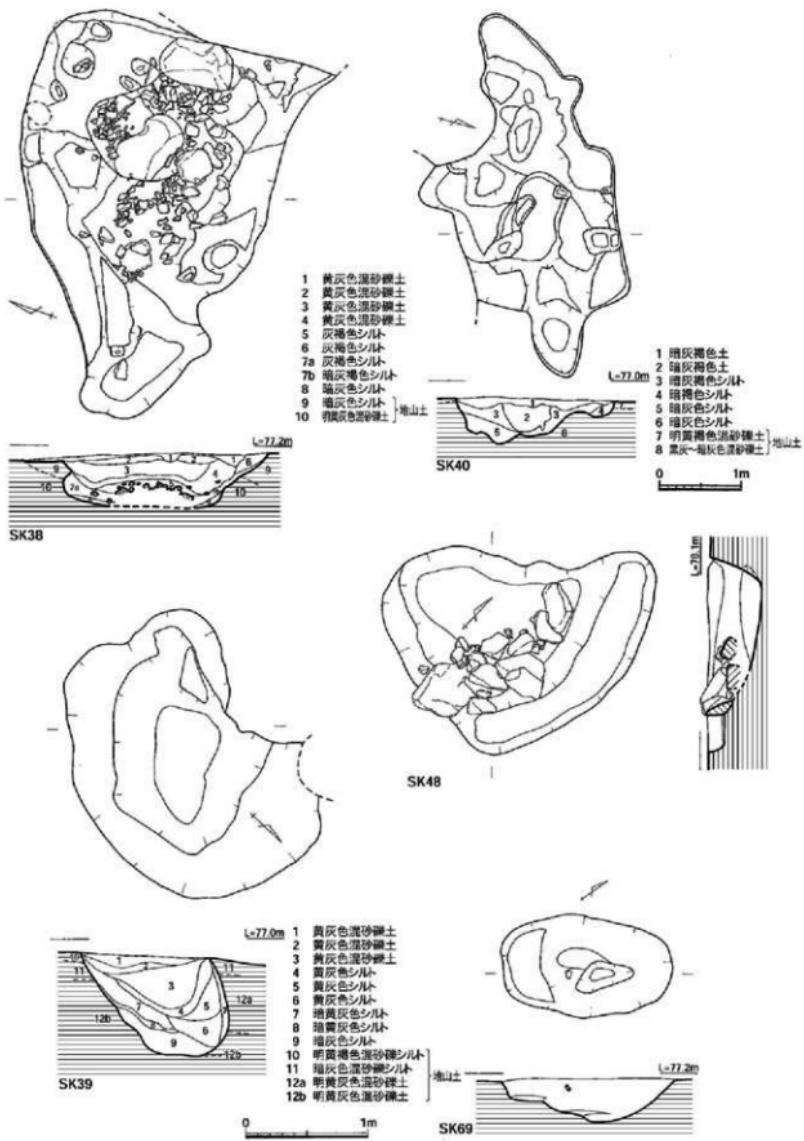


Fig.7 SK38・39・40・48・69実測図 (1/40・38・40-1/60)



Ph.19 SK39土層断面（東から）

6.5×4.9深さ0.64mを測る大型の倒木痕で、東側をSD01に切られる。発掘したのは北半部で、東西方向の中央に10～20cm前後の礫が高さ20cm程集石した様な状態で検出された。当初は倒木痕に魔石処理した人為と考えたが、SK47・48等でも認められ、一部が地山の砂礫層に連なっていくものがあり、樹木の生長に伴って根が周囲の石を取り込んで引き寄せたもの可能性が高いと考える。



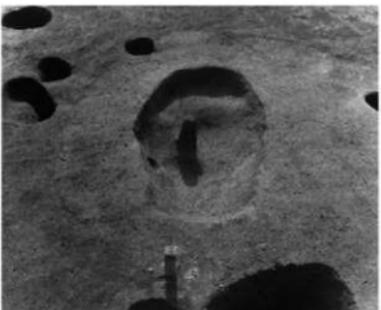
Ph.20 SK39全景（東から）

SK39 (Fig.7 Ph.19.20) 調査区西端のH3グリッドに位置する、2.3×2.5深さ0.93mを測る倒木痕で、西端部は調査区外に延びる。発掘したのは東半部で、穴の直交方向の南東側から、地山の崩落土が流入し（9～7層）、順次同方向からの自然流土で埋没しており、北西方向に倒置したことを示している。流入土中から晩期条痕文土器と焼土粒を検出した。

SK40 (Fig.7 Ph.21) SK39の東4mのG3グリッドに位置する、3.4×3.0深さ0.65mを測る倒木痕で、南東側で他の倒木痕と切り合っている。発掘したのは西半部で、2～4層は根とともに持ち



Ph.21 SK40全景（東から）



Ph.22 SK69全景（東から）

上がった地山土とおもわれ、亀裂が入ってブロック化している。SK39同様にこの隙間に穴の直交方向の南東側から、地山の崩落土が流入しており（5層）、同じく北西方向に倒置したことを示している。流入土中から早期黒曜石製鉄形器を検出した。

SK48 (Fig.7 Ph.18) SK38の西に隣接しH4グリッドに位置する。2.15×3.7深さ0.45mを測る倒木痕で、東半部を調査している。内部の南北方向に10~30cm前後の礫が高さ25cm程集石した状態で検出された。礫が底面の地山の砂礫層に連なっており、SK38同様根が周囲の石を取り込んで引き寄せたものと考える。

SK69 (Fig.7 Ph.22) 調査区南西部のH12グリッドに位置する。2.5×2.4深さ0.31mを測る倒木痕で、中央部のみを調査している。明灰色細砂の中央に黄褐色シルトが堆積するもので、内部から晩期条痕土器片を検出している。



Ph.23 B7グリッド土器出土状況（西から）

(4) 繩文調査グリッド

中世・近世遺構の検出面の黄褐～黄灰色シルト・暗灰～黒灰色シルトが包含層となっており、上部包含層である黄灰色・暗灰色シルトが比較的厚く残る中央部を中心に、遺構検出・掘削時に縄文土器を検出した地点に2mグリッドを11箇所設定し、包含層内の遺物の検出を行った。殆どは黄褐～暗灰色シルトから田村・手向山式期押型文土器・燃糸文土器・石器・晩黒川式土器・石器が検出され、下層の黒灰色シルトからは若干の黒曜石土器と土器片を検出したのみである。



Ph.24 D4グリッド集石（南から）

B7グリッド (Fig.8 Ph.23) 調査区中央北東端に設置した。15cm前後の黄褐色シルト（1層）下に10cm前後の暗灰褐色シルト（6層）を挟んで以下に黒灰色シルトが堆積する。堆積は西から東に緩く傾斜する。黒灰色シルト中に幅70深さ5~10cm前後の自然流路が南流する。遺物は暗灰褐色シルト層で早期燃糸文土器2片を検出した。

D4グリッド (Fig.8 Ph.24) 調査

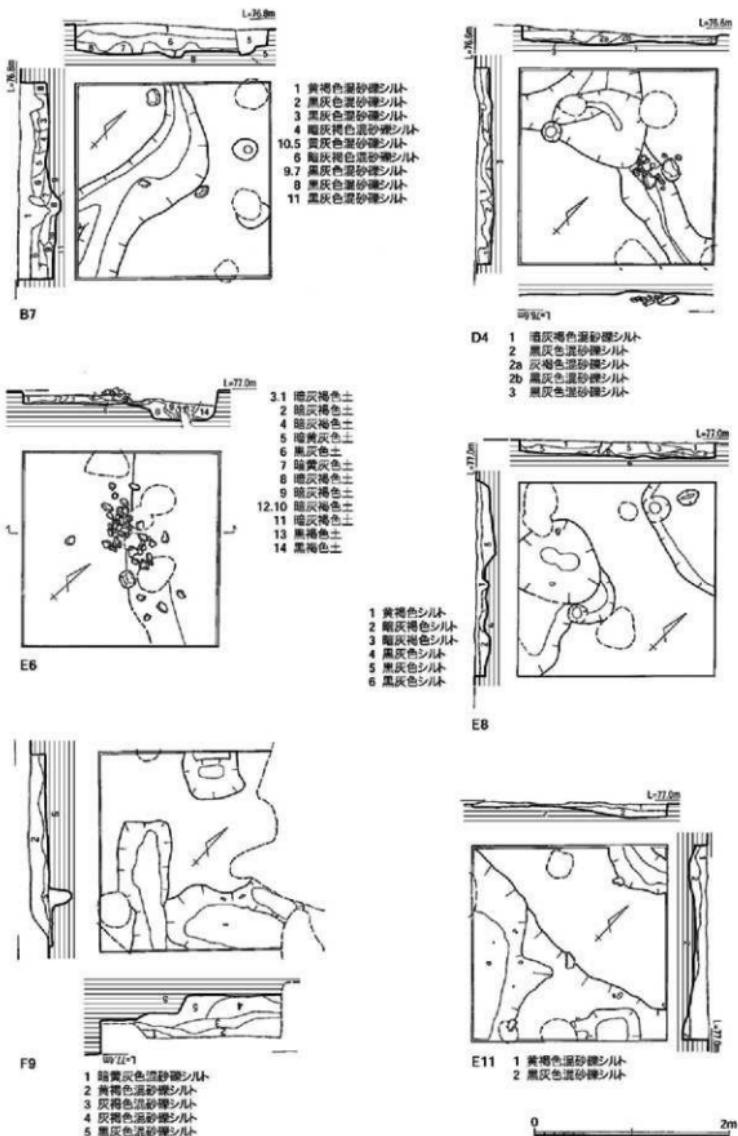


Fig.8 B7・D4・E6・E8・E9・E11範囲調査グリッド実測図 (1/50)

区北側の土壤群の中央に設置した。削平著しい地点で黄褐色シルトは残らず、下層の暗灰褐色シルト（1層）が西壁に5cm前後残るのみで、東側ではこれも削平される。以下に黒灰色シルトが堆積し、黒灰色シルト中に幅40～100深さ5～10cm前後の自然流路が東流する。これが埋没後上面に50cmほどの範囲に自然礫の集石がのるが、被熱したものは無い。

E6グリッド (Fig.8 Ph.25) 調査区中央北西寄りで建物SB01柱穴壁に焼石が数点露出したため、集石炉の可能性を考え設置した。5cm前後の暗黄灰色シルト（5層）下面付近の中央部で65×150cmの範囲に5～10cm前後の赤く被熱した花崗岩円礫の集石を検出した。



Ph.25 E6グリッド集石炉（南東から）

暗黄灰色シルトはグリッド中央で北東方向に段を成して傾斜しており、集石の半分はこの傾斜面に流出しており、本来は径50cm程の集石炉の半分が傾斜面にずり落ちた状態である。下層の暗灰褐色シルト（1～4・8～12）も同様に北東方向に傾斜している。遺物は黒耀石剥片を1点検出した。



Ph.26 E8グリッド土器出土状況（東から）

E8グリッド (Fig.8 Ph.26) 調査区中央北寄りに設置した。5cm前後の黄褐色シルト（1層）下に南西と北東の窪みに10cm前後の暗灰褐色シルト（2・3層）が堆積する。遺物は黄褐色シルト中から早期撚糸文土器2片を検出した。これはG10グリッド出土土器に接合している。

F9 グリッド (Fig.8 Ph.27) 調査区中央G10グリッドの北に設置した。東を早期のSK33に接する。10cm前後の暗黄灰色シルト（1・2層）下に南東壁に接して、30cm程の窪みに暗灰褐色シルト（3・4層）が堆積する。以下は黒灰色シルトである。遺物は暗黄灰色シルト下面から早期撚糸文土器他2片を検出した。



Ph.27 F9グリッド土器出土状況（北から）

E11 グリッド (Fig.8 Ph.28) 調査区中央G10グリッドの東11mに設置した。黄褐色シルト（1層）の残りは全体に薄く、南東方向に緩く傾斜して5～20cm前後堆積し、中間の暗灰褐色シルトは無く、直下が黒灰色シルトとなる。遺物は黄褐色シルト中から早期橢円押型文土器・山形押型文土器5片・黒耀石・サヌカイト剥片等まとめた資料を検出した。



Ph.28 E11グリッド土器出土状況（北から）

G9・10 グリッド (Fig.9 Ph.29～31) 調査区中央の晩期の倒木痕SK93に接して3mグリッドを設定した。上層の黄褐色シルトは殆ど削平されるが、直下の暗灰褐色シルト（2～4層）中から早期撚糸文土器等まとめた資料が出土し、さらに南東へ広がる可能性が出てきたためさらに4m拡大し資料の検出を行った。暗灰褐色

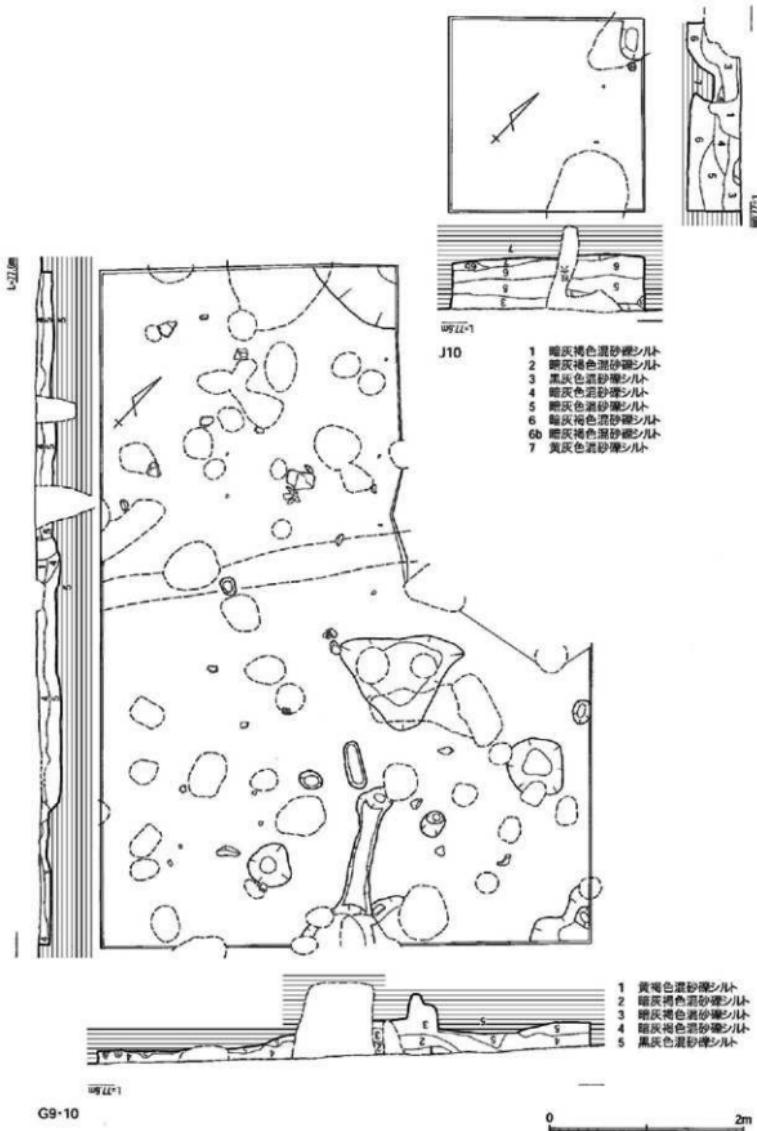


Fig.9 G9・10・J10調査グリッド実測図 (1/50)

シルトは南西で5cm、北東方向に厚く15cm前後堆積し緩く傾斜する。南東壁で貯藏穴SK94と接しており、これから幅20cm長120深8cm程の溝が北西に延びる。

遺物は暗灰褐色シルト中から出土し、田村・手向山式期の楕円押型文土器・撲糸文土器等19片、サヌカイト剥片6点を検出した。3～4個体分で破片は大きく、接合するものが多い。

この暗灰褐色シルト4層ではサンプリングを行い、AMS法・花粉分析・植物珪酸体分析を行った（付録）。結果の大要は、年代はBC510～460年、シイ類を主体とした照葉樹林で河川部でヨシ類・スキ・チガヤ等のウシクサ類が繁茂する古環境が復元されている。

J10グリッド (Fig.9) 調査区中央西寄りに設置した。削平が深く黄褐色シルトは無く、中間の暗灰褐色シルト（1・2層）も南東側に一部残るのみで下層の黒灰色シルト（3層）が露出している。

遺物は暗灰褐色シルト下面から黒灰色シルト上面で土器片を1点・黒耀石剥片を1点検出した。

この3層でも炭粒のサンプリングを行い、AMS法を実施したが年代はAD685～725年であった。



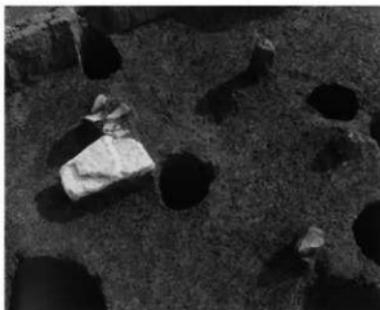
Ph.29 G10グリッド土器出土状況（北から）

K8グリッド (Fig.10 Ph.32.33)
調査区南西壁近くに設置した。
さらに削平が著しく下層の黒
灰色シルト（1・2層）が露出
している。遺物は1層中から黒
耀石核を1点検出した。

L9グリッド (Fig.10 Ph.34.35)
調査区南西壁中央に設置した。
西半部に倒木痕があり、この
内側の暗灰褐色シルト（4～10
層）中から手向山式期の網目
撲糸文土器片を4点検出した。



Ph.30 G9グリッド土器出土状況（北から）



Ph.31 G9グリッド押型文土器出土状況



Ph.32 K8グリッド全景（東から）



Ph.33 K8グリッド石核出土状況



Ph.34 L9グリッド全景（東から）



Ph.35 L9グリッド土器出土状況

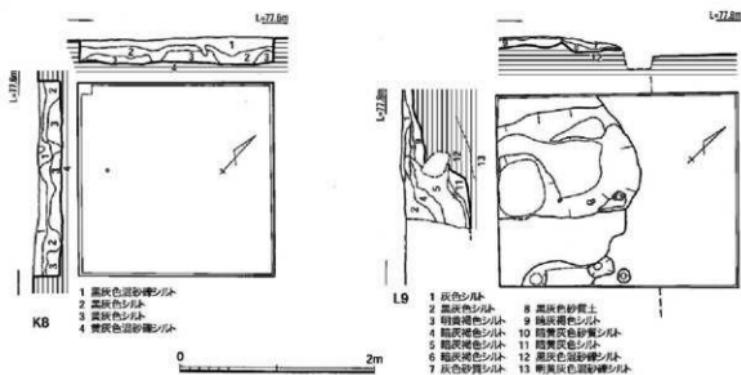


Fig.10 K8・L9調査グリッド実測図 (1/50)

2) 中世の調査

中世では溝1条・焼土壙29基・土器焼成窯1基・土壙9基・柱穴多数を検出した (Fig.11)。

溝は北東部で12世紀後半～13世紀初の幅2.5m・一辺約50mと思われる方形区画溝で、南辺の中央部に陸橋を設けている。内側には2×3間の掘立柱建物をはじめ多数の柱穴と土壙・土器焼成窯が検出され、内野・石釜地区での中心施設と考えられる。



Ph.36 SD01土層断面 (F3南から)



Ph.37 SD01土層断面 (E9西から)



Ph.38 SD01土層断面 (F6北から)



Ph.39 SD01土層断面 (B11西から)



Ph.40 SD01陸橋部 (北から)



Ph.41 SD01祭祀跡 (西から)

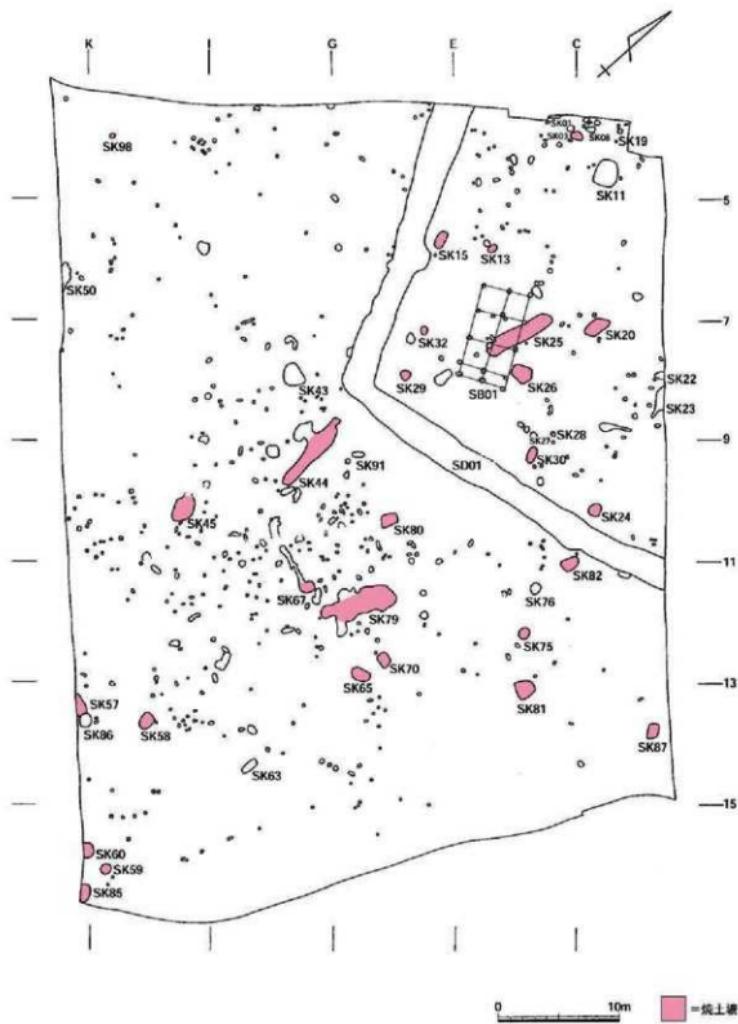


Fig.11 中世遺構分布図 (1/400)

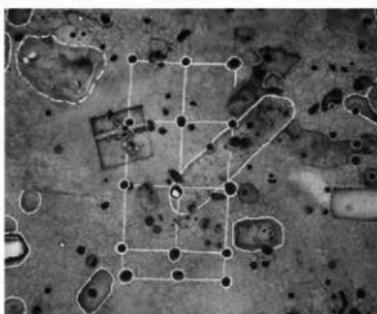
(1) 溝

溝は北東部でSD01を1条検出したのみである。

SD01 (Fig.3.12 Ph.36~42) SD01は調査区北東部を方形に区画する溝で西辺で現況24.5m・南辺で31.5m・幅約2.5m深さ50~90cmを測る。方位は西辺でN-38°-W・南辺でN-67°-Eにとり、内



Ph.42 SD01・C10中国陶器出土状況



Ph.43 SB01全景（南から）

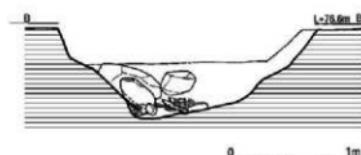
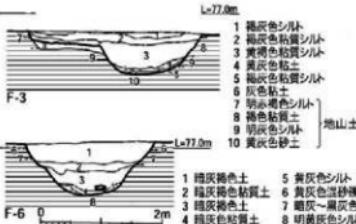
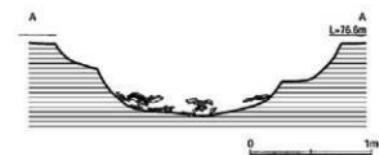
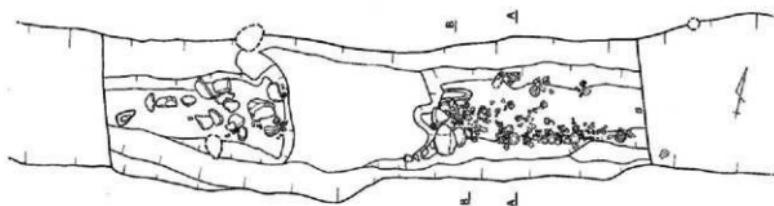


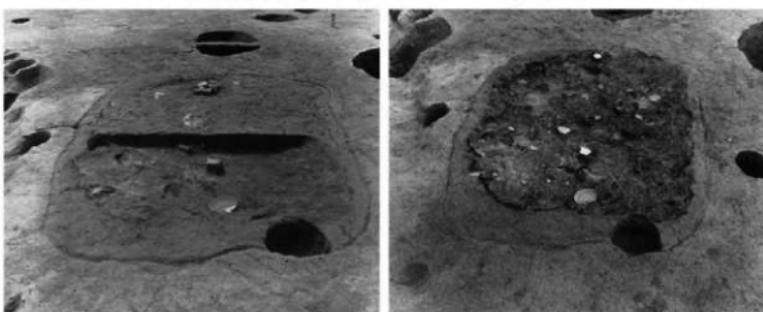
Fig.12 SD01陸橋部・土層断面実測図 (1/40・1/80)

角は105°を測る。南辺の西端から23.5m程東の位置に幅2m高さ40cm程の陸橋を設けている。これを中央と仮定すると一片約50m、半町の区画が想定できる。この陸橋東側を主に、多量の土師器壺・皿と少量の貿易陶磁器を出土している。殆どが破損し溝の外側から床直上に堆積しており、何らかの祭祀跡と思われる。時期は12世紀後半～13世紀初である。この陸橋から東は床上に中砂が10cm程堆積し水が流れている。西は粘質土が堆積し淀んだ状態である。その後半分程を客土で埋め戻し（F3-3層・F6-3層・E9-5.4層・B11-5～10層）、10cm程自然堆積後、再度客土を行い（F3-1層・F6-1層・E9-2層・B11-1.2層）、その機能を終えている。

(2) 捩立柱建物

中世の柱穴は溝内外で多数検出したが、現地で把握できたのは区画内のSB01のみである。

SB01 (Fig.13 Ph.43) 区画内南西に位置し、長大な焼土壙SK25を切る。南面庇付3×2間7.8×3.85



Ph.44 SK11焼成面内土層断面（北から）

Ph.45 SK11土器焼成面（北から）

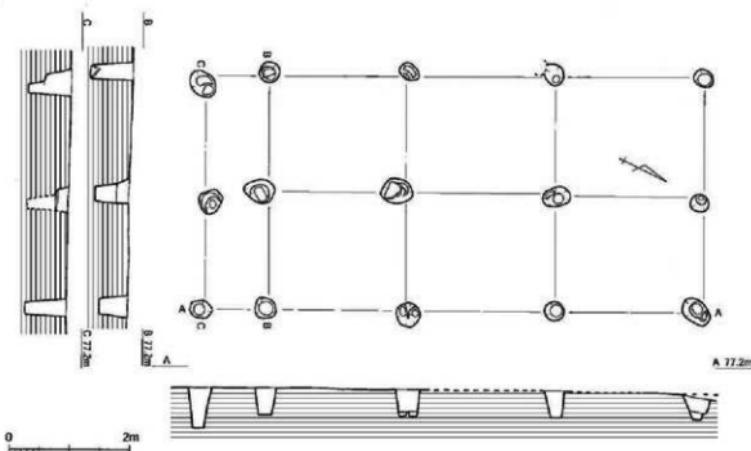


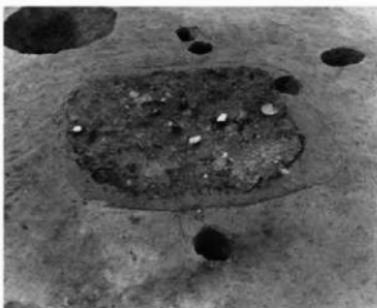
Fig.13 SB01実測図 (1/80)

mの総柱建物である。方位をN-42°-Wにとり、ほぼ区画溝に沿う。底は南に1m程延びる。周囲は円形で径30~40cmを測り、深さ50~70cmと残りがよい。柱は径15cm前後である。遺物は土師器壊・皿片を少量検出した。

(3) 土器焼成場

方形区画内の北寄りでSK11の1基を検出した。

SK11 (Fig.14 Ph.45~47) 方形区画内の北寄り、C4グリッドで検出した。本遺構は2.3×1.8m深さ15cm程の浅い皿状の周丸形土壙を掘削し、この内側に3~5cm防湿のため砕いた焼土を混和した暗黄褐色シルトを貼り（1・2層）1.8×1.5m深さ10cm程の浅い皿状の焼成部を形づくっている。方位はN-23°-Wにとり、区画溝に沿う。断面は5~20mm程火熱のため全面が暗褐色に変色し、表面にはカーボンが薄く吸着している。この上に1~2cm程炭粒混じりの灰層が堆積し、床面から数mm浮いて、区画溝の祭祀と同時期の土師器壊・皿の破片が数十片検出される。入念な防湿の地業と



Ph.46 SK11土器焼成面（東から）



Ph.47 SK11焼成面断面（北から）

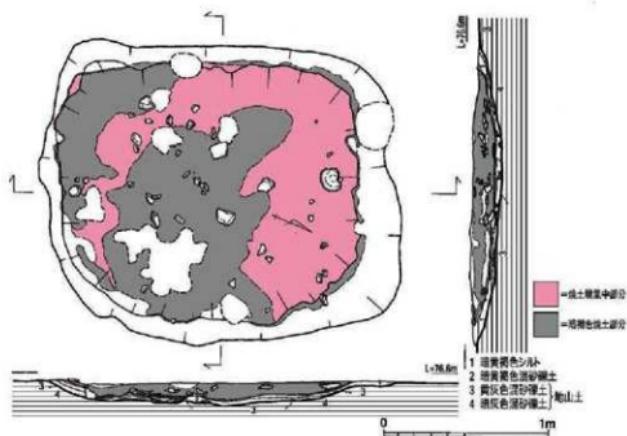


Fig.14 土器焼成場SK11実測図（1/30）



Ph.48 SK11型取り作業（捺押し）



Ph.49 SK11型取り作業（シリコン塗布）



Ph.50 SK11型取り作業（シリコン塗布）



Ph.51 SK11型取り作業（裏打ち）



Ph.52 SK01全景（南から）

底面全面が被熱すること、土師器片が底面からまとまって出土する状況から土器焼成遺構と考えられる。また、被熱の程度にばらつきがあり全体に焼け方は弱く、炉壁の出土も無いため、「窯」構造ではなく、焼成時上面を灰や青草等で覆っただけの「覆い焼き」の焼成場であったと考えられる。

中世において本市域で検出された土器焼成遺構は、博多区上月隈遺跡第2次調査出土の窯構造の瓦器焼成遺構SX036と本例の2例のみであり、土器生産を考える上で貴重な資料である。また、目を北部九州に広げても、該期の

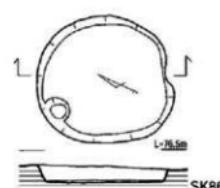
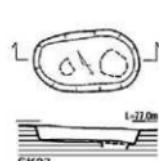
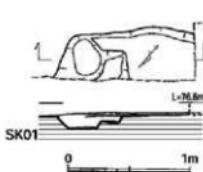


Fig.15 SK01・27・86実測図 (1/40)

遺構は10遺跡10基にも満たず、今後も良好な状態で検出される可能性は決して高くはない。現在、上月限遺跡第2次調査出土遺構をふくめ、いずれも保存されておらず残っているのは本例のみであった。よって調査研究上また展示など教育普及活動の見地からも多方面からの高い活用が期待できると判断し、レプリカを作製することとした。型取り作業は平成15年9月30日・10月3日の両日、福岡市埋蔵文化財センター比佐陽一郎・片多雅樹両氏に依頼し実施した（Ph.48～51）。

（4）土壤

土壤は幅30m程の中央南北方向の範囲に9基分布する。SK01・85は区画溝と同期の13世紀前後で、SK86からは唯一瓦器塊が検出された。SK22・50は朝鮮陶器皿片を出土し15～16世紀の時期を示す。これら以外は土師器の小片を出土するのみでまとまった遺物の出土はなく、遺構の性格や詳細な時期は不明のものが多い。



Ph.53 SK15土層断面（北から）

SK01 (Fig.15 Ph.52) 区画内北端のD3グリッドに位置する。大半が調査区外にのび、1.1×0.4m深さ5cmを測る方形土壤で、東側の深い部分は他遺構との切り合いである。床面は平坦で、覆土中から同窯系皿と土師器片を検出した。

SK27 (Fig.15) 区画内南中央寄りで焼土壤SK30北のD8グリッドに位置する。平面梢円形で、0.85×0.5m深さ16cmを測る。床面は平坦で、覆土中から縄文晩期深鉢片・石甕を検出した。

SK86 (Fig.15) 調査区南端のL13グリッドに位置し、焼土壤SK57を切る。平面円形で、1.15×1.05m深さ14cmを測る。床面は平坦で、覆土中から土師器片と唯一瓦器塊を検出した。



Ph.54 SK15全景（北から）

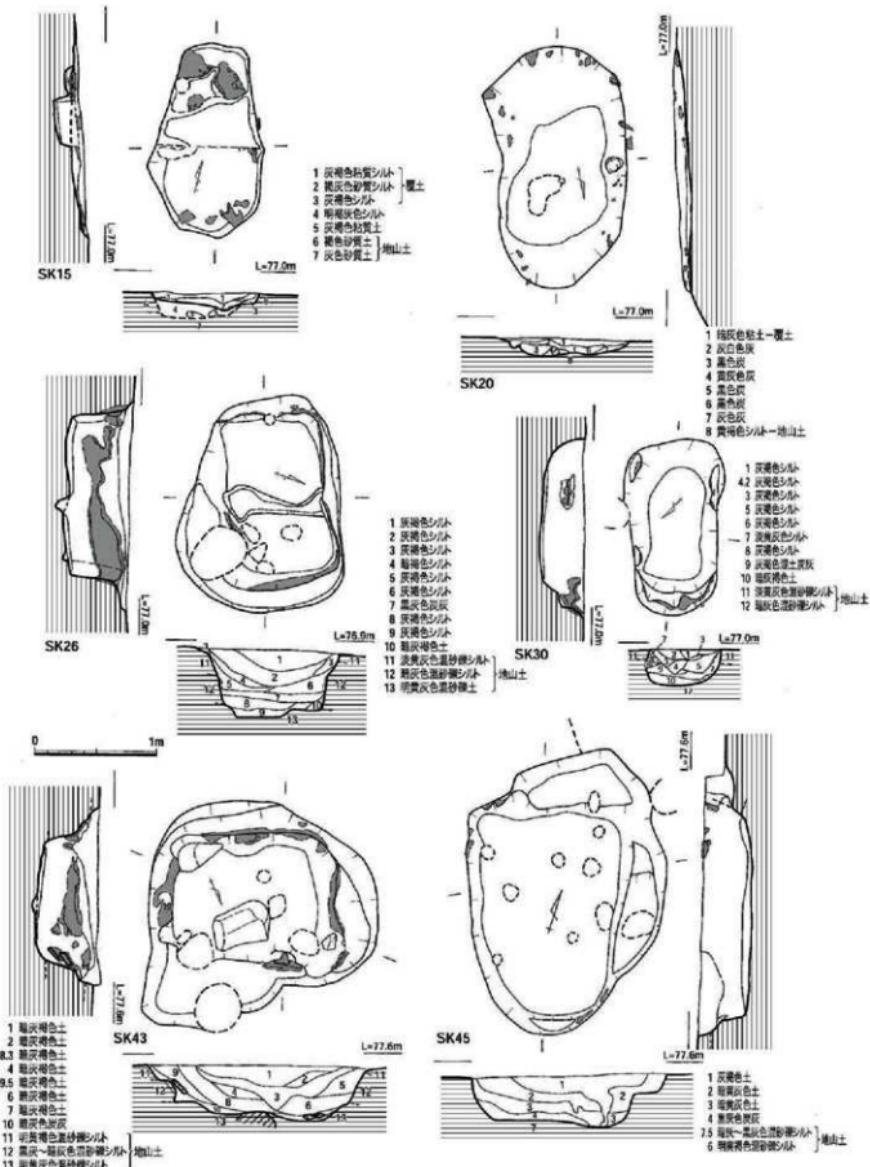
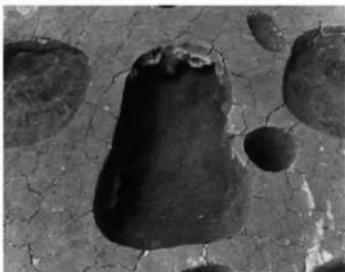


Fig.16 烧土堆SK15・20・26・30・43・45実測図 (1/40)



Ph.55 SK30全景（南から）

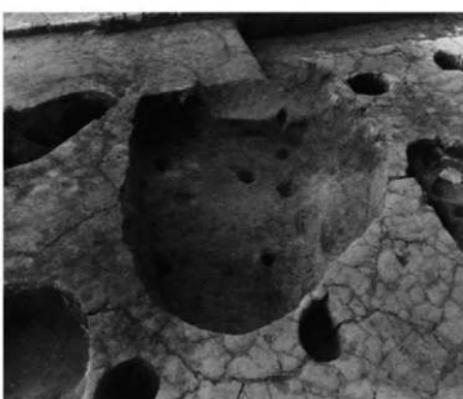
(5) 焼土壙

焼土壙は土壙同様、幅30m程の中央南北方向の範囲を主に、調査区全面で検出される。29基を検出しているが、殆どの遺構から遺物の出土は無く、SK20・30の2基から土師器小片が出土したのみで、時期確定が難しい。覆土上面が灰褐色土で、他の中世遺構と同じであり、大部分は中世前後の時期と考えられる。

平面形では、古代に属するといわれる台形のA類SK26・45・67・80・81・82・87の7基が調査区東半部に、内2基は区画内にありSK26と建物SB01とは切り合い関係にある。幅の狭い長台形A'類SK15・20・30・57・85の5基が区画内に3基分布し、これは方向が区画溝にほぼ沿っており同時期の可能性が考えられる。小型長方形のB類SK43・58・65の3基が方形区画外に、径1m前後で円形皿状のC類SK03・13・19・28・29・32・59・75・90の9基が全域に、長さ5m前後幅1m程の炭窯の可能性もある長大なD類SK25・44・79の3基が方形区画内に1基、これは建物SB01に切られ古代に属する可能性が高い。南外側には2基分布する。



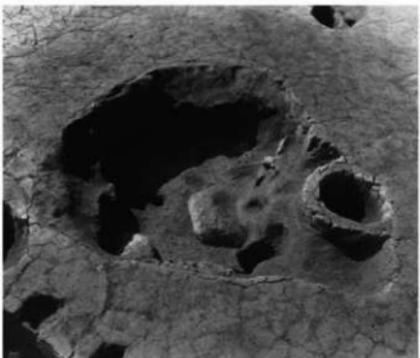
Ph.56 SK45土層断面（南から）



Ph.57 SK45全景（南から）

SK15 (Fig.16 Ph.53.54) 区画内西辺中央のF5グリッドに位置する1.5×0.8m深さ13cmを測るA'類土壙。中央部は掘りすぎた部分である。削平が著しく焼土壁は一部に残るのみである。壁に沿って炭・焼土が、床直上に5cm程炭粒を半量含む土層中(2層)から検出される。

SK20 (Fig.16 Ph.59) 区画内中央寄りのC7グリッドに位置する1.95×1.0m深さ13cmを測るA'類土壙。削平が著しく焼土壁は断片が残るのみである。床直上に10cm程炭



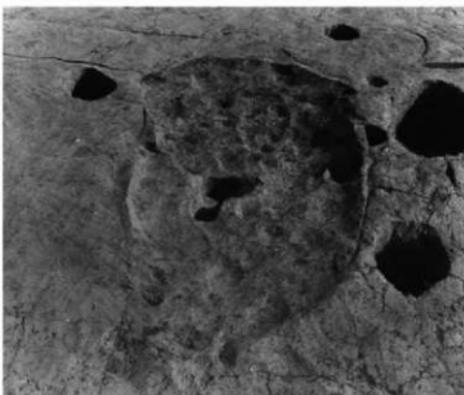
Ph.58 SK43全景（南西から）

粒・灰層が堆積する（2～7層）。覆土中より土師器坏・皿片が出土している。

SK26 (Fig.16 Ph.60,61) 区画内のSK20の南7m D7グリッドに位置する1.8×1.2m深さ48cmを測るA類土壌。建物SB01と切り合の関係にあり、これに先行する可能性が高い。残りは良好で、上端から20～25cmは円弧状に自然に崩落しており、当時の現況に近い状態と思われる。床上5cm程から同程度に炭粒・灰層が堆積し（7層）、使用まで掘削後しばらく放置されたことを示している。焼土壁の半分ほどが無く、土壌内に落ち込んだ状況もないため取り除かれた

可能性がある。遺物の出土は無い。

SK30 (Fig.16 Ph.55) 区画内の南辺中央のD9グリッドに位置する1.45×0.65m深さ36cmを測る小型のA'類土壌。削平はやや深く、上端から10cm程しか焼土壁は残らない。床上7cm上から炭粒・灰層が5cmほど堆積し（9層）、同じく使用までしばらく放置されたことを示している。焼土壁の大部分は失われおり、取り除かれた可能性がある。覆土中より土師器坏片が出土している。

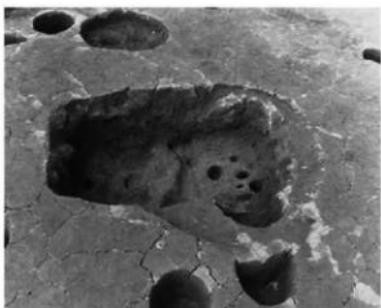


Ph.59 SK20全景（北から）

SK43 (Fig.16 Ph.58) SD01角南の



Ph.60 SK26土層断面（東から）



Ph.61 SK26全景（南から）

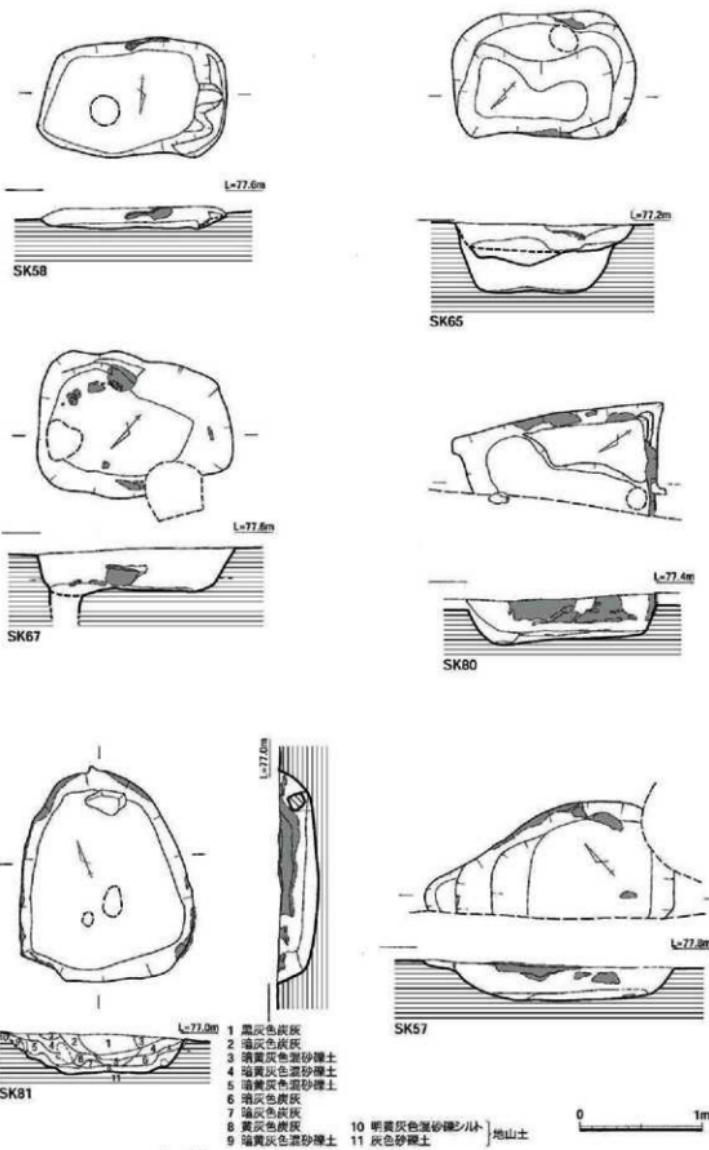


Fig.17 焚土塘SK58・65・67・80・81・57実測図 (1/40)

区画外4mH7グリッドに位置する2.2×1.6m深さ50cmを測るB類土壌。残りは良好で、上端から15cmは円弧状に自然に崩落している。この崩落面も焼けしており、1次使用後、壁が崩落するほどの期間後再度使用している。炭粒・灰層の堆積は床直上（10層）のみで、再使用時に埋土を掘り上げている。焼土壁は一部、土壌内に流れ込んでいる。縄文晩期条痕文土器片が出土する。

SK45 (Fig.16 Ph.56.57) 調査区南中央寄りのJ10グリッドに位置する1.8×1.2m深さ42cmを測るA類土壌。上端から15cm程は壁面が抉れており、焼土壁も上端から10cm程で断片しか残っていない。床直上5cm程に炭粒・灰層が堆積し（4層）、上位の堆積層には焼土は少量しか含まれず、焼土は取り除かれた可能性がある。遺物の出土は無い。

SK58 (Fig.17 Ph.62) 調査区南のK13グリッドに位置する1.5×0.9m深さ17cmを測る小型のB類土壌。削平は深く、焼土壁が上端から10cm程で西壁に断片でしか残っていない。床直上5cm程に炭粒・灰層が堆積する。縄文晩期条痕文土器片が出土する。

SK65 (Fig.17) 調査区西寄りのG12グリッドに位置する1.5×1.0m深さ22cmを測る小型のB類土壌。北部の大半は他構造の切り合いである。削平は深く、また上端からの崩落も床上10cmまで円弧状に深く入っており、焼土壁は上端から10cm前後断片でしか残っていない。床直上5cm程に炭粒・灰層が堆積する。縄文晩期条痕文土器片・黒耀石剥片が出土する。

SK67 (Fig.17) 調査区中央寄りのH11グリッドに位置する1.55×1.15m深さ33cmを測るA類土壌。削平は深く、焼土壁は壁面に残っておらず、床上に焼土壁のブロックが数個壁に沿って滑り落ちている。床直上5cm程に炭粒・灰層が堆積する。縄文晩期条痕文土器片が出土する。

SK80 (Fig.17 Ph.63) 調査区中央のG10グリッドに位置する1.75×1.35m深さ35cmを測るA類土壌。残りは比較的良好で、焼土壁は上端から20cm前後残り部分的に崩落している。床直上5cm程に炭粒・灰層が堆積する。遺物の出土は無い。

SK81 (Fig.17 Ph.64) 調査区東部のD13グリッドに位置する1.7×1.3m深さ32cmを測るA類土壌。削平は深く、焼土壁が上端から10cm程で残る程度で部分的に崩落している。床直上から3面の炭粒・灰層が堆積（6～8層）し、3度の使用が伺える。暗黄灰色土の堆積後中央に炭粒・灰層が堆積（1・2層）。覆土中より縄文晩期粗製深鉢・精製浅鉢土器片がまとまって出土する。覆土も縄文包含層のものであり、遺構自体が晩期に属するのか、縄文包含層を掘削して客土したものか判断が難しい。

SK85 (Fig.17 Ph.65) 調査区南隅のL16グリッドに位置し、西半部が調査区外にある。1.55×1.15m深さ28cmを測るA'類土壌。削平は深く、焼土壁が上端から10cm程残る程度で大部分は崩落している。床直上5cm程に炭粒・灰層・焼土が堆積する。遺物の出土は無い。



Ph.62 SK58全景（北東から）



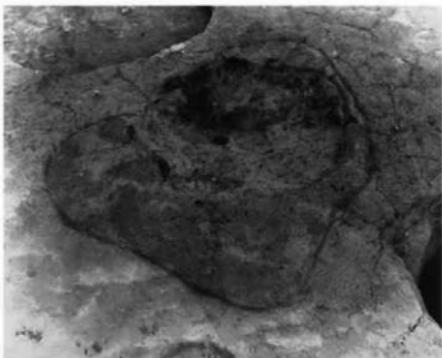
Ph.63 SK80全景（東から）



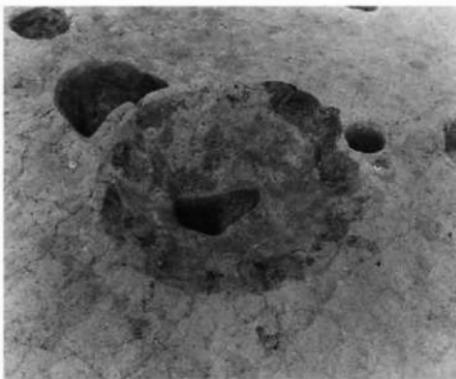
Ph.64 SK81全景（北から）



Ph.65 SK85全景（南から）



Ph.66 SK03全景（北から）



Ph.67 SK13全景（南から）

Fig.18は径1m前後で円形のC類とした焼土壙で、調査区全域にSK03・13・19・28・29・32・59・75・90の9基が分布している。

断面は10cm前後の浅い皿状で、床面が薄く1cm弱焼ける。土器焼成壙SK11に小規模ながら形態が似るため、数基分の覆土を水洗した。結果土器片・焼成時の破裂片も検出されず炭粒のみ検出された。規模・形態からもA・A'・B類のように炭を得るような遺構とも考えられず、鍛冶剝片や床面に厚く還元焼成された粘土床も無く、鍛冶炉の可能性もない。焚火等の炉跡の可能性がもっとも高いと思われる。

遺物の出土は無く、SK32が近世のSK36に切られ、SK28が縄文時代のSK36を切り、この間の時期を示している。

SK03 (Fig.18 Ph.66) 調査区北端付近のD3グリッドに位置する。0.75×0.65m深さ8cmを測る。焼土は部分的に広がるが、断面では底面に幅30cm以上厚1cm弱認められ、薄いため遺構掘削時に剥がれたものが多いと考えられる。床直上には5~6cm炭粒・灰層が堆積する（3・4層）。

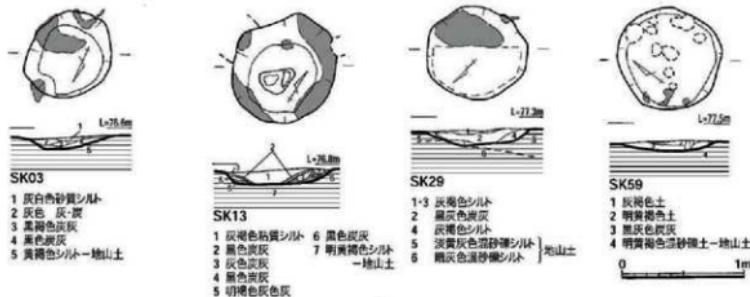
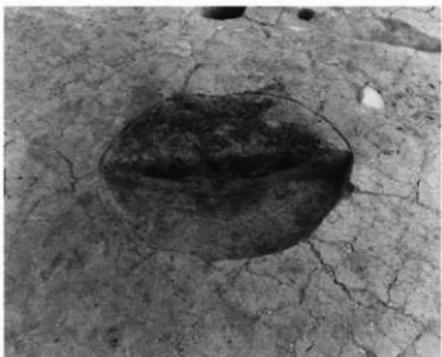
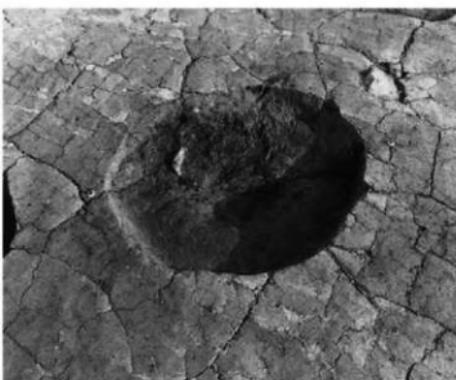


Fig.18 焼土壙SK03・13・29・59実測図（1/40）



Ph.68 SK29土層断面（北から）

SK13 (Fig.18 Ph.67) 調査区中央北寄りのE5グリッドに位置する。0.9×0.85m深さ12cmを測る。焼土は壁沿いに広がるが、断面では全面に厚さ1cm弱認められる。床直上には中央部で薄く7cm程炭粒・灰層が2面堆積する(6・5層、4~2層)。

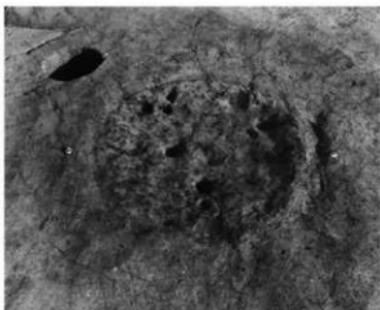


Ph.69 SK29全景（北から）

SK29 (Fig.18 Ph.68.69) 区画内南隅付近のF7グリッドに位置する。0.8×0.75m深さ14cmを測る。北半部は掘り過ぎている。焼土は床中央から壁までに広がる。床直上には5cm程灰褐色土が堆積し(3・4層)、この上に10cm程炭粒・灰層が堆積(2層)し、掘削後一時放置されたことを示す。



Ph.70 SK59土層断面（北から）



Ph.71 SK59全景（北から）

Fig.19は、長さ5m前後幅1m程の平地式の炭窯の可能性もある平面両端を丸く仕上げる長大なD頸とした焼土壌で、SK25・44・79の3基が、方形区画内に1基、南外側には2基分布する。SK25とSK44がほぼ南北方向に20mの距離を置いて、SK44の12m東に並行するようにSK79が位置し、時期の近い計画的な配置を伺わせる。

平地式の炭窯の可能性を示したが、内部の焼け方が浅いこと・横方向に焚口が確認できないこと・内部に窯壁片の落ち込みが認められないこと・出土する炭が堅炭ではなく軟質の礫炭であること等から炭窯とするには確信が持てない。

方位はN-23°-E～16°-Wをとり、区画溝とは大きく異なり、またSK25が中世建物SB01に切られていたり、13世紀前後以前の時期に属する可能性が高い。



Ph.72 SK25検出状況（北東から）



Ph.73 SK25全景（北東から）

SK25 (Fig.19 Ph.72.73) 方形区画内南寄りのD7グリッドに位置する。方位はN-5°-Eにとり区画溝とは大きく異なり、 $5.75 \times 1.25\text{m}$ 深さ12cmを測る。焼土は床面に10～40cmの範囲で数カ所に残る。床面上に5cm程炭粒・灰層が堆積（5層）し、炭粒・灰を半量含む暗灰褐色土を挟んで5cm程炭粒・灰層が堆積（3～1層）しており、2回の使用が認められる。遺物の出土は無い。

SK44 (Fig.19 Ph.74) SK25とほぼ同軸・同方向でこれの南20m程のH9グリッドに位置する。方位はN-16°-Wにとり、 $6.3 \times 1.1\text{m}$ 深さ14cmを測る。焼土は床面に10cm弱の範囲で2カ所に残るのみである。床中央には幅20深さ5cm程の深い溝を掘削する。床上には南から3～7cm程炭粒・灰層が、1cm弱の炭粒・焼土粒・灰を1/3～2/3含む暗灰褐色土を挟んで（3.4.6.8.10.11層）4面堆積しており（5.7.9.12層）、4回の使用が認められる。礫炭の断片が出土する。

SK79 (Fig.19 Ph.75) SK44の12m東に並行するようにG11グリッドに位置する。方位はN-23°-Eにとり、 $6.35 \times 1.75\text{m}$ 深さ35cmを測り、3基の中で残りは一番深い。焼土は南西の壁面に幅20cm弱の範

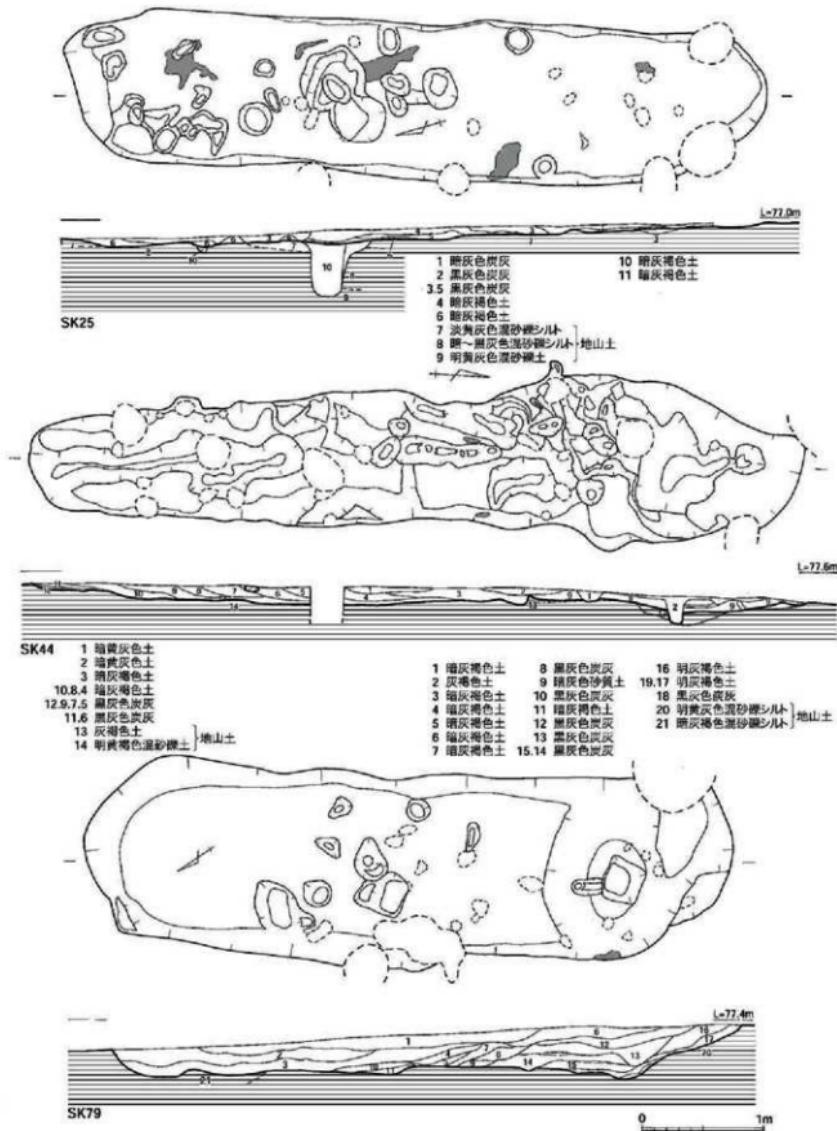


Fig.19 焼土壤SK25・44・79実測図 (1/40)



Ph.74 SK44全景（南から）



Ph.75 SK79全景（東から）

(2) 土壙 (Fig.20)

土壙はSK14・18・92の3基を検出した。調査区北側に位置し、SK14・18は圃場整備以前の田園の法面下に位置している。それぞれ1m弱の小型の土壙である。SK92も田園の小段下に位置し方向も一致している。それぞれ土師器小片を検出しているが、覆土は他の近世遺構と同様の灰色砂質土である。

団で1カ所に残るのみである。断面は船底型で、南端の床に径1.15m深さ5cm程の浅い土壙を掘削し、この上位を中心床上に南から5~10cm程度粒・灰層が3面(18・15・14・13~8層)堆積しており、3回の使用が認められる。焼炭の断片が出土する。

3) 近世の調査

近世は溝1条・土壙3基・水田開墾時の廃石土壙10基・柱穴少數を検出した。縄文時代・中世とは逆に調査区周辺部に分布する (Fig.20)。

(1) 溝

溝は調査区南西端部近くでSD02を1条検出した。

SD02 (Fig.20) 調査区南西端部近くで、N-78°-Wに方位をとって幅30cm深さ10cm弱長さ13mにわたって直線的に延びる。これは圃場整備以前の田園の区割りの方向と一致し、用水溝であったと思われる。遺物の出土はないが、覆土は他の近世遺構と同様の灰色砂質土である。

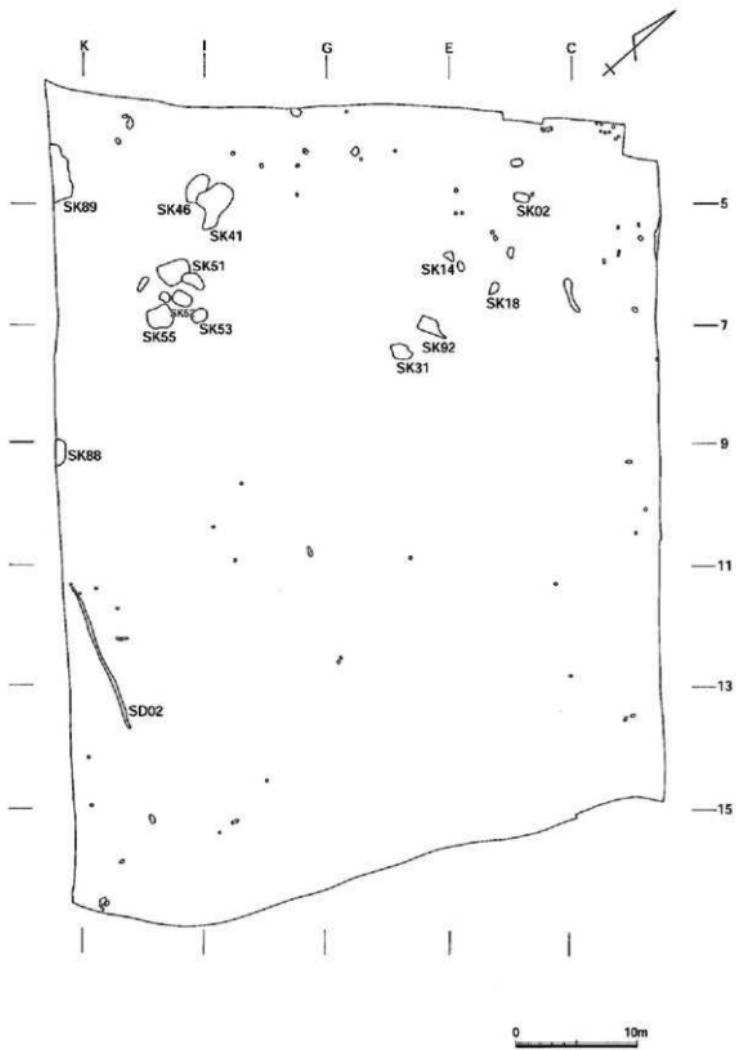


Fig.20 近世遺構分布図 (1/400)

0 10m

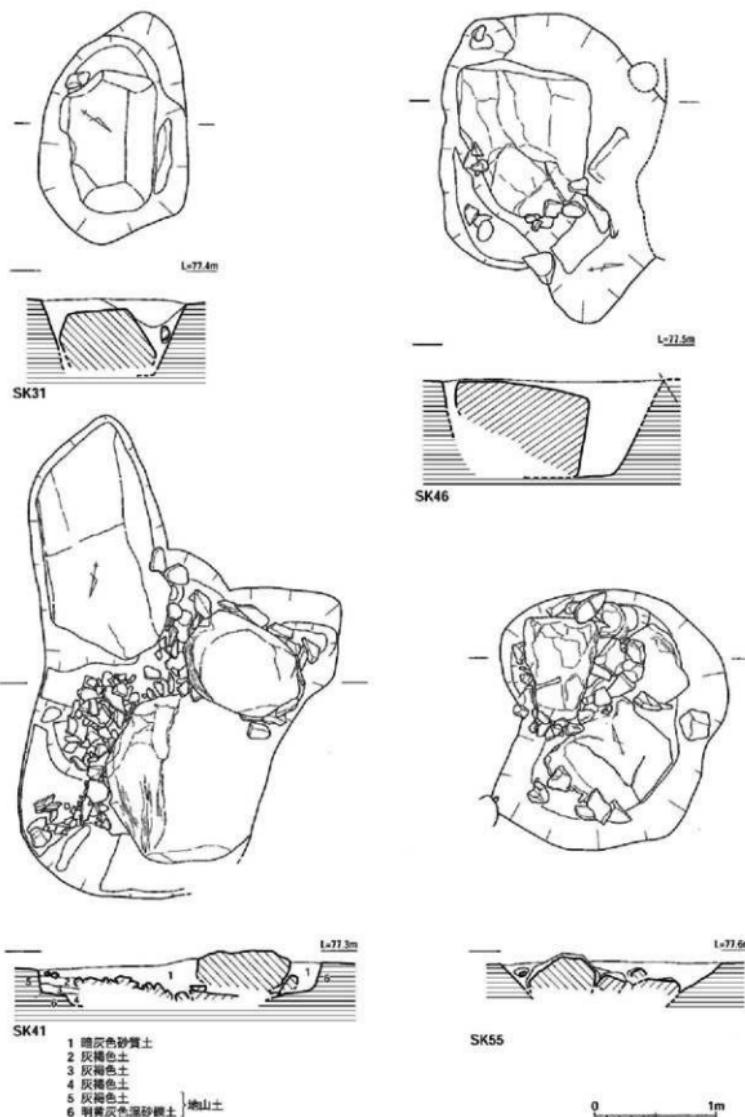


Fig.21 廢石場SK31・41・46・55尖測圖 (1/40)

(3) 廃石土壌

水田の本格的開墾時に、1～2m前後の大石を掘り込んだ土壌内に落とし込んで耕作土下に埋め込んだ廃石土壌10基を調査区西側で検出した。

13世紀前後の中世の生活遺構は居館を含め短期間に廃棄され、以降現代まで耕作地として活用されつづけたよう、近世以外はSK22・50で15・16世紀代の資料を検出したのみである。本格的な水田開発は近世に行われたとおもわれ、廃石土壌SK46・53から肥前系陶磁器片が検出される。



Ph.76 SK31全景（北から）

この廃石土壌の工法は室見川中流域の吉武・浦江遺跡群内の横穴式石室を廃棄して、腰石の大石の側下を、腰石の大きさに合わせて掘り下げて横に倒し込み、耕作土下に埋め込む工法と同一である。早良平野では、近世の水田開発時に広く行われた工法のようである。

SK31 (Fig.21 Ph.76) 調査区中央北寄りのF7グリッドに位置する。1.95×1.2mの土壌内に1.15×0.8×0.55mの花崗岩大石1石を埋め込み、石の上面は耕作面下になっている。土師器坏片が出土している。



Ph.77 廃石土壌群（南から）



Ph.78 SK46全景（北から）

SK41 (Fig.21 Ph.78) 調査区西部のJ5グリッドに位置し同じ巖石土壌SK46を切る。 $1.95 \times 0.9 \times 0.55 \cdot 1.4 \times 1.25 \times 0.35 \cdot 1.0 \times 0.7 \times 0.4\text{m}$ の花崗岩大石3石を大石の形に合わせて掘り込んだ $4.0 \times 2.0\text{m}$ の土壤内に埋め込んでいるが深さの見込みを誤った様で、10cm程耕作面上に突出しており、これを大金槌ではつった石屑を多量に埋め込んでいる。覆土から土師器片が出土している。

SK46 (Fig.21 Ph.77) SK41に隣接しこれに切られる。 $2.55 \times 1.8 \times 0.8\text{m}$ の土壤内に・ $1.3 \times 1.1 \times 0.8\text{m}$ の花崗岩大石1石を埋め込んで耕作土下に納めている。覆土から肥前系の染付皿・陶器皿・土師器片が出土している。



Ph.79 SK41全景（北から）

SK55 (Fig.21 Ph.80) 調査区西部のSK41の南6mのJ6グリッドに位置し、 $0.85 \times 0.6 \times 0.35 \cdot 0.8 \times 0.8 \times 0.30 \cdot 0.65 \times 0.45 \times 0.25\text{m}$ の花崗岩大石3石と20cm前後の石多数を $2.2 \times 1.6\text{m}$ の土壤内に埋め込んでいるがSK41同様深さの見込みを誤り、7cm程耕作面上に突出しており、これをはつた石屑を多量に埋め込み、大石には前の跡が残る。覆土から土師器片が出土している。



Ph.80 SK55全景（南から）

3. 2区の調査

調査第2区は第1区の南8mの1.5m高い田面に位置する。調査面積145m²で、縄文時代の包含層、中世焼土壙1基・柱穴を検出している。

縄文時代は、中央の7×7m深さ30cm程に暗黄灰色～灰褐色シルトの包含層が残り早期田村・手向山式期撚糸文土器を検出している。



中世では南部で
焼土壙SK01を1基
検出した。他にト
レンチ・表土から
白磁皿・土師器
壺・皿・鍋を検出
している。

Ph.81 2区全景（南西から）

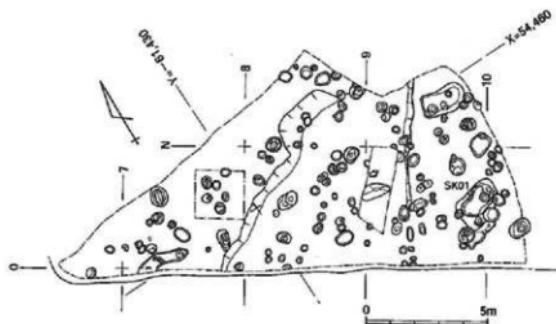


Fig.22 2区遺構全体図 (1/200)

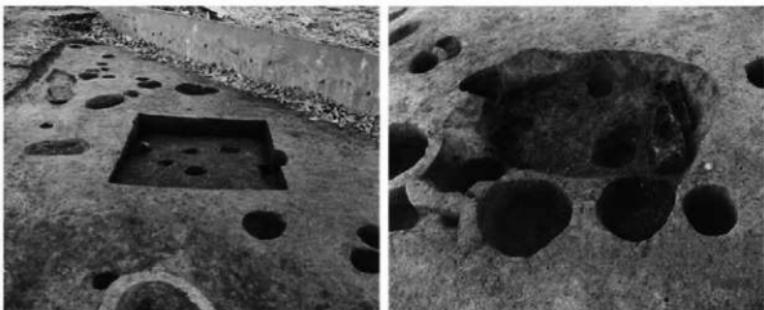
1) 繩文時代の調査

縄文時代は包含層を検出した。包含層は中央の 7×7 m深さ30cm程に暗黄灰色～灰褐色シルト (Fig.23-1～3層) の包含層が残り早期田村・手向山式期撫糸文土器片を検出している。北のO7グリッドに 2×2 mの調査グリッドを設定したが資料の検出は無かった (Fig.23 Ph.82)。

2) 中世の調査

中世の遺構は焼土塙SK01のみである。

SK01 (Fig.23 Ph.83) 調査区南部のO9グリッドに位置する 1.9×1.05 m深さ31cmを測るA類土塙。削平はやや深く、焼土壁は床から15cm程上に一部に残り、北西の壁は崩落してまとまって床面まで滑り落ちている。東西両側に炭が残り、東側は幅15cm程の材を3本横にして入れてある。



Ph.82 繩文調査グリッド（南から）

Ph.83 SK01全景（南から）

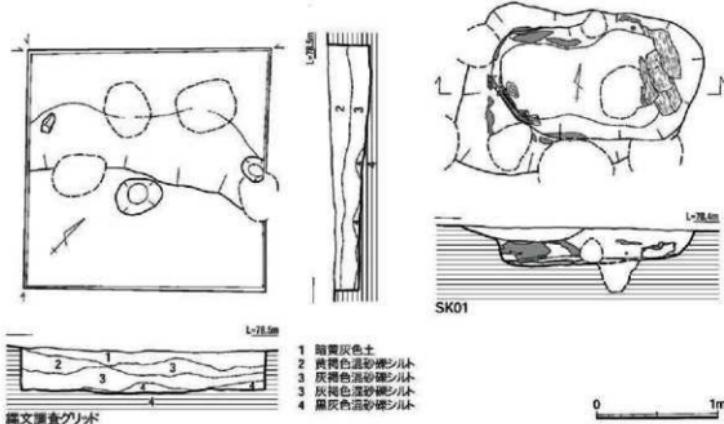


Fig.23 繩文調査グリッド・SK01実測図 (1/40)

4. 3区の調査

調査第3区は第1区の南西80m、標高80mの田面に位置する。調査面積355.5m²で、縄文時代の倒木痕15基・土壙3基、弥生時代の倒木痕1基、中世溝1条・焼土壙1基・柱穴を検出している。削平は深く包含層下層の黒灰色シルトが残るのみである。

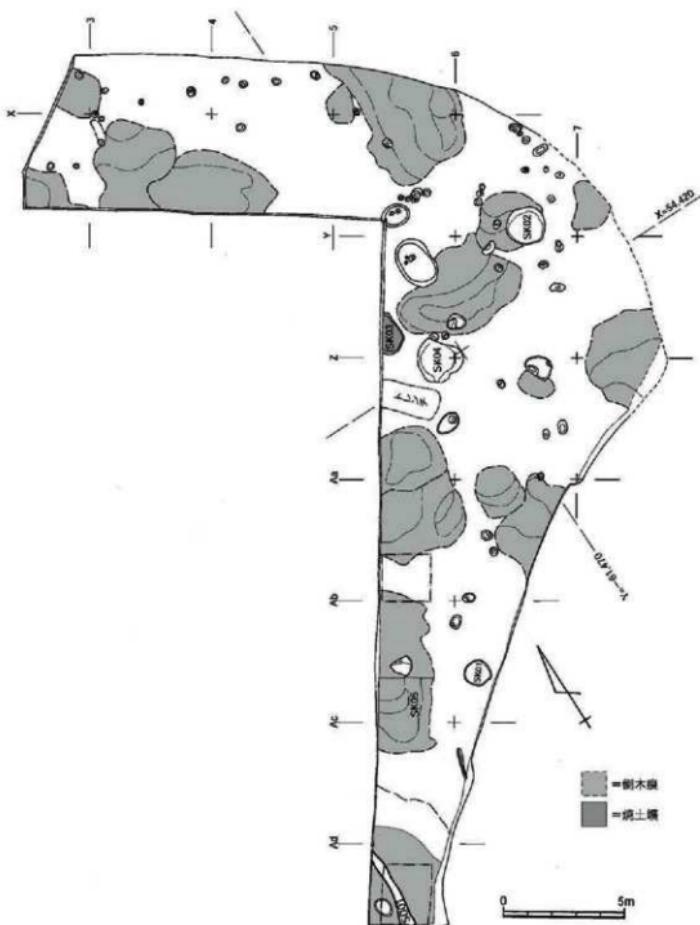


Fig.24 3区構造全体図 (1/200)

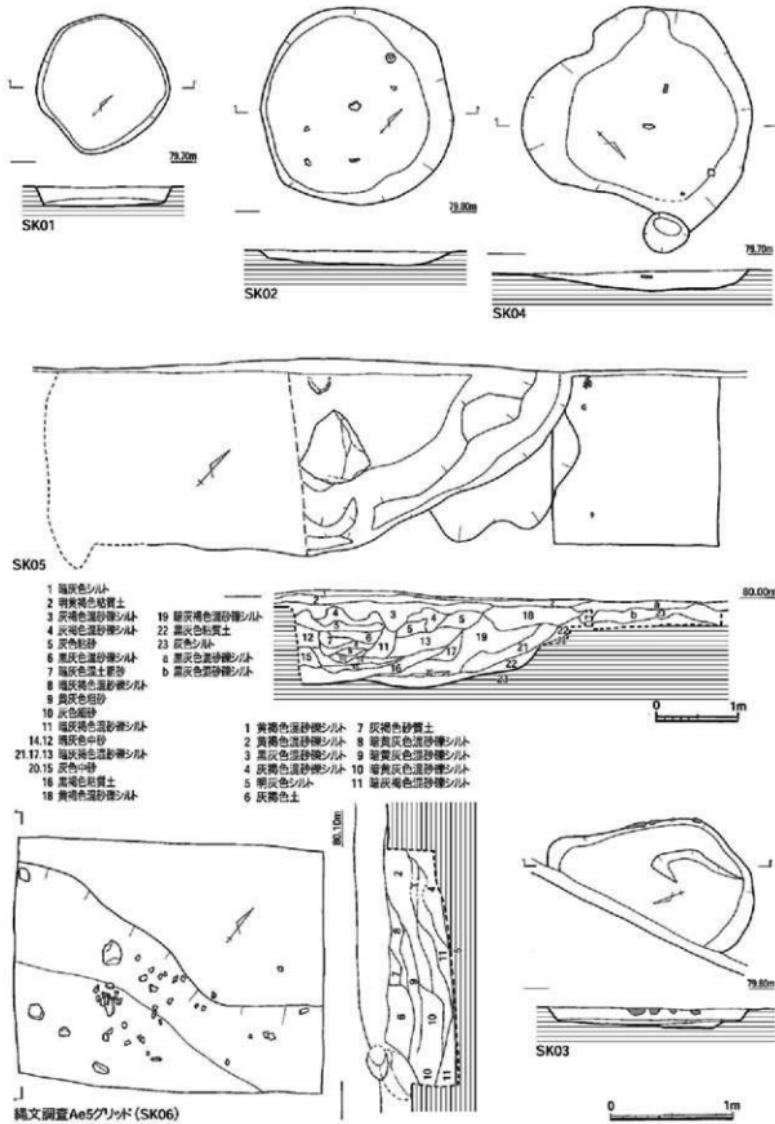


Fig.25 3D構造・縦文調査グリッド実測図 (1/40・05-1/60)



Ph.84 2・3区全景（東から）



Ph.85 3区全景（南東から）

1) 繩文時代の調査

縄文時代は、ほぼ全域で径5m前後の15基の倒木痕を、中央寄りに晩期の土壌3基を検出している。検出面は下層の黒灰色シルトで早期・晩期の包含層はのこっていない。

(1) 倒木痕 (Fig.24)

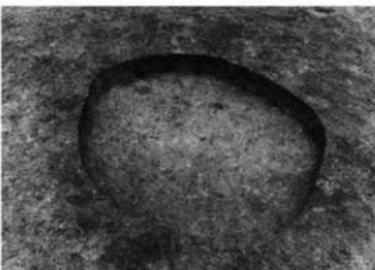
倒木痕はほぼ全域で検出され、径5m前後の15基が分布し密集度は高い。覆土にのみ黄褐色・暗灰色の早期・晩期包含層がのこり、堆積方向は南東方向と北東方向がめだつ。調査期間の関係で掘削したのはSK05と南端Ae5のSK06の1基にグリッド掘削を行ったのみで、これからは黒川式期の土器片多数を検出した。他は1基が晩期土壌SK02に切られる以外は詳細な時期は不明である。

SK06 (Ae5グリッド) (Fig.25 Ph.91~93) 調査区南端部のAe5グリッドに位置し、全体の1/4程の検出で大半は調査区外にある。4.0×2.8m以上深さ50cmを測る。2・8～10層黄褐色～暗黃灰色シルト間で、北西から流れ込んだ状態で晩期黒川式期の土器片多数を検出した。

(2) 土壌 (Fig.25)

土壌は調査区中央部でSK02・04の2基、南部でSK01の1基を検出した。径1～2m深さ20cm弱の浅い円形土壌で、何れも晩期黒川式期の土器片を検出する。

SK01 (Ph.86) 調査区南部のAc6グリッドに位置する1.05×1.0m深さ19cmを測る円形土壌。床面は平坦で晩期条痕土器片等を出土した。



Ph.86 SK01全景（南から）



Ph.87 SK02全景（南から）



Ph.88 SK04全景（南から）



Ph.89 SK03全景（南から）

SK02 (Ph.87) 調査区中央のY6グリッドに位置する1.65×1.6m深さ13cmを測る円形土壌。同様に浅い土壌で、床面から5cm程浮いて黒川式精製浅鉢・粗製深鉢片5片等を検出した。

SK03 (Ph.89) SK02の西7mのAa5グリッドに位置する1.9×1.6m深さ18cmを測る不整円形土壌。浅い土壌で、床面から10cm程浮いて晩期条痕文土器片3片等を検出した。

2) 弥生時代の調査

弥生時代は、倒木痕SK05を1基を検出している。

SK05 (Fig.25 Ph.90) 調査区南部のAc5グリッドに位置し、全体の1/2は調査区外にある。6.3×2.3m以上深さ80cmを測る。覆土の堆積は南東方向で、北の拡張グリッドAb5の落ち際a層中から本調査唯一の弥生前期土器を検出した。

3) 中世の調査

中世の遺構は溝SD01と焼土壙SK01のみである。

SK03 (Fig.25 Ph.89) 調査区中央部Z5グリッドに位置する1.75×0.9m深さ15cmを測るA類土壙。削平は深く、焼土壁は床から10cm程上に一部に残り、他は崩落している。

SD01 (Fig.24) 調査区南端でSK06を切り、方位をN-3°-Eにとって直線的に延びる。幅35深さ15cmを測る。白磁碗・瓦器塊・土師器片等を出土した。



Ph.90 Ab5縄文調査グリッド（南から）



Ph.91 Ae5縄文調査グリッド（南東から）



Ph.92 Ae5土壙出土状況（東から）



Ph.93 Ae5土壙出土状況（南から）

IV. 小結

今回の調査では、東から1区3,491.5m²・2区145m²・3区355.5m²、市道を挟んでさらに7区346m²・4区390m²・5区961m²・6区558m² (Fig.2) の延べ6,247m²の調査を実施した。

今回まとめたのは東半部の1～3区で、検出した遺構は、1区で縄文時代の倒木痕47基・集石炉1基・貯蔵穴3基・土壙29基・柱穴・包含層、中世溝1条・焼土壙29基・土器焼成壙1基・土壙10基・掘立柱建物1棟・柱穴多数、近世溝1条・土壙3基・水田開墾時の磨石土壙10基・柱穴少數、2区で縄文時代の包含層、中世焼土壙1基・柱穴、3区で縄文時代の倒木痕15基・土壙3基、弥生時代倒木痕1基・中世溝1条・焼土壙1基・柱穴を検出した。

1区を中心述べると、縄文時代早期・晚期は遺構検出面の黄褐色～黄灰色シルト・暗灰褐色～黒灰色シルトが包含層となっており、この包含層・倒木痕を主にして早期田村・手向山式期・晚期黒川式期を主とした遺物が検出される。倒木痕は中央20×30m程度の空隙範囲をもって周辺に径5m前後のものが密集し、検出した集石炉・土壙等遺構の大半と包含層遺物の集中部はこの空隙地内にある。早期以降巨木が生育しない程度に伐開が繰り返され活用された空間の可能性がある。倒木痕中から遺物を検出したのは5基でこのうち4基は晚期であり、倒木時期における晚期の占める割合が高い。また、中央G10グリッドの早期資料が集中する包含層中の炭化物のAMS測定を実施したが、測定年代はBC510～460で、縄文早期包含層にまで晚期以降の擾乱が及んでいることを示しており、晚期以降に急速に森林伐開が進んだ可能性が考えられる。

中世では1区先端近くで12世紀後半～13世紀初の幅2.5m・一辺約50mと思われる方形区画溝が検出され、南辺の中央部に陸橋を設けている。内側には2×3間の掘立柱建物をはじめ多数の柱穴と土壙が検出され、内野・石釜地区での中心施設と考えられる。この施設を中心に開墾が本格的に進んだと考えられる。この区画溝開削直後に多量の土師器壊・皿・少量の中国陶磁を用いた祭事を執り行っており、用いられた土師器は区画内の土器焼成壙SK11で焼成された可能性が高い。

土器焼成遺構は本市域では上月限遺跡第2次調査検出の12世紀前半の「煙管状窯」と呼称される瓦器焼成窯SX036につぐもので、本例は2.3m×1.8m・深さ10cm開丸方形皿状で、焼成面から土師器壊・皿の破片数十片を出土する土師器焼成遺構である。他市でも検出例はまれであるが、通常では上月限例は土師器焼成窯に、本例は小型長方形・梢円形平面プランとドーム天井部を有する瓦器焼成窯が主で、本市出土例は何れも他地域とは使用法が逆転している。また、本例や上月限例の様に単基で検出されるものは職人の工房の他、本例のように、使用に際しまとまって注文する場合、職人の出仕事として、出先で原材料を調達し、窯を構築して現地生産することも視野に入るべきと考える。また本例は、土壙の内側に碎いた焼土を混和した砂質の強い暗黃褐色シルトを貼って火床としており、隣接する焼土壁を取り除く焼土壙の存在から、混和剤と土器焼成の燃料を得るため、焼土壙から焼炭と焼土を取り出し焼成遺構構築と焼成燃料の一部に用いる可能性を考え、また、焼成面を構成する土が砂質でドーム天井を構築するのが困難であること、焼成面内に窯壁の断片も検出されておらず、上面を灰や青草等で覆った「覆い焼き」の焼成壙と考えている。

焼土壙は、44基を検出している。少量の土師器と縄文土器以外資料の出土が無く時期比定が難しいが、中世遺構との切り合いから大半が古代から、開発が始まる12世紀後半～13世紀初以前の所産と考えられる。平面台形・方形のA・A'・B類としたものは焼炭を得る焼成遺構、円形のC類は焚火等の炉跡に、長さ5m以上のD類は平地式の炭窯とされるが、これは本例では数点の疑義がある。

参考文献：「上月限遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第633号
「古代の土師器生産と焼成遺構」開拓研究会編 1997年

Tab. 1 1区遺構一覧

遺跡番号	グリッド	種別	時 期	遺構/壁・横・深3(m)	主な出土遺物	備 考	面積
SK001	D3	土塁	12C後～13C初	1.1+α×0.4+α×0.05	土師器(杯) 国安監系有縫(直)		15
SK002	D4	輪柱アンカー	近代	1.25×0.65×1.05	泥前系陶器(直) 鹿泉窯系有縫(直)		
SK003	D3	土塁	古代～中世	0.75×0.65×0.08			18
SK004	D4	土塁	縄文	1.2×1.1×0.21			
SK005	E4	土塁	縄文	1.35×0.9×0.56			
SK006	C3	土塁	中世	0.85×0.4×0.41	土師器(杯)		
SK007	D4	土塁	縄文	1.7×1.4×0.46			
SK008	C4	土塁	縄文	0.85×0.75×0.21			
SK009	D5	土塁	縄文	1.1×0.4×0.18			
SK010	C5	土塁	縄文 晩期	1.35×0.95×0.4	条痕文土器		6
SK011	C4	土器焼成場	12C後～13C初	2.2×1.75×0.13	土師器(杯・皿・鍋)		14
SK012	F4	土塁	縄文 晩期	1.0×0.6×0.13	条痕文土器		
SK013	E5	円形焼土塁	古代～中世	0.9×0.65×0.12			18
SK014	E5	土塁	近世	0.85×0.75×0.1	土師器(杯)		
SK015	F5	焼土塁	中世	1.5×0.8×0.13			16
SK016	E4	土塁	縄文 晩期	2.2×0.8×0.2	条痕文土器 土師器(杯)		
SK017	E5	蹲伏土塁	縄文 晩期	6.2×1.1×0.12	縄文(半圓切溝跡) 焼土 嵌		
SK018	E6	土塁	近世	0.9×0.8×0.12	土師器		
SK019	C3	円形焼土塁	古代～中世	0.5×0.4×0.03			
SK020	C7	焼土塁	中世	1.85×1.0×0.13	土師器(杯・皿)		16
SK021	C6	土塁	縄文	1.25×0.85×0.45			
SK022	B7	土塁	15+16C	1.15+α×0.55×0.13	土師器(直) 朝鮮陶器		
SK023	B8	土塁	中世	2.2+α×1.85×0.1	土師器		
SK024	C10	焼土塁	中世	0.9+α×1.05×0.3			
SK025	D7	炭塗?	古代～中世	5.75×1.25×0.12		SB01に切られる	19
SK026	D7	焼土塁	古代～中世	1.8×1.2×0.48			16
SK027	D8	土塁	中世	0.85×0.5×0.16	縄文(深跡) 安山岩(石器)		15
SK028	D8	円形焼土塁	古代～中世	0.3+α×0.4+α×0.21	縄文(深跡)	SK26を切る SK27と接合	
SK029	F7	円形焼土塁	古代～中世	0.8×0.75×0.14			18
SK030	D9	焼土塁	中世	1.45×0.65×0.36	土師器(杯)		16
SK031	F7	焼石上塁	近世	1.85×1.2×0.62	土師器(外)		21
SK032	F7	円形焼土塁	古代～中世	0.7×0.7×0.27	瓶	SK28に切られる	
SK033	F9	不整土塁	縄文早期	2.1×1.8×0.6	熟糞土器		6
SK034	C8	不整土塁	縄文	1.65×1.85×0.21	縄文土器		
SK035	C7	蹲伏土塁	縄文 晩期	2.8×0.5×0.13	条痕文土器		
SK036	D8	土塁	縄文	1.2×0.9×0.19		SK28に切られる	
SK037	G9	土塁	縄文	1.35×1.05×0.16	安山岩(仰)		
SK038	G5	倒木痕	縄文	4.9×2.85×0.64	瓶		7
SK039	H3	倒木痕	縄文 晩期	2.3×1.5×0.93	条痕文土器 備土		7
SK040	G3	倒木痕	縄文早中期	3.4×1.85×0.65	ob(石器)		7
SK041	I5	焼石上塁	近世	4.8×2.0×0.13	土師器		21
SK042	G9	不整土塁	縄文	2.25×0.55×0.6	縄文土器 安山岩(仰)		
SK043	H7	焼土塁	中世	2.2×1.8×0.5	条痕文土器		16
SK044	H9	炭塗?	古代～中世	6.3×1.1×0.14	安山岩(仰) 嵌		19
SK045	J10	焼土塁	古代～中世	1.8×1.2×0.42			16
SK046	J4	焼石上塁	近世	2.55×1.8×0.78	須恵器(直) 土師器(杯)陶器(直)染付(直)		21
SK047	H6	倒木痕	縄文	3.5×1.5×0.46			
SK048	H4	倒木痕	縄文	2.15×1.5×0.45			7
SK049	I8	倒木痕	縄文	3.4×1.15×0.79			
SK050	L6	土塁	15+16C	2.8×0.8+×0.15	朝鮮陶器(直)		
SK051	J6	焼石上塁	近世	2.7×1.9×0.91	土師器(焼)		
SK052	J6	焼石上塁	近世	1.8×0.95×0.41	須恵器(直)		
SK053	J6	焼石上塁	近世	1.3×1.8×0.32	土師器(焼・他) 染付(直)		
SK054	K8	貯藏穴	縄文 晩期	1.7×1.45×1.34	縄文(深跡)		5
SK055	J6	焼石上塁	近世	2.2×1.8×0.44	土師器		21
SK056	K7	貯藏穴	縄文 晩期	1.35×1.0×0.97			5
SK057	I13	焼土塁	中世	2.85×0.85+×0.28	ob(仰)	SK36に切られる	17
SK058	K13	焼土塁	中世	1.5×0.9×0.17	条痕文土器		17
SK059	K16	円形焼土塁	古代～中世	0.85×0.85×0.08			18
SK060	L15	焼土塁	中世	0.8+×1.2×0.14			

遺構番号	内寸	種別	時期	幅員/奥行き/深さ(単位)	主な出土遺物	備考	類別
SK061	H10	土壙	縦文	1.5×0.7×0.01	安山岩(II)		
SK062	H10	土壙	縦文晚期	1.25+α×1.9×0.15	条痕文土器		
SK063	H14	土壙	中世	1.55×0.65×0.33	土師器 条痕文土器		
SK064	H12	倒木痕	縦文晚期		条痕文土器 安山岩(II)		
SK065	G12	焼土層	中世	1.5×1.0×0.22	縦文土器 ob(II)		17
SK066	H11	土壙	縦文早期	1.5×0.65×0.26	燒系文土器		6
SK067	H11	焼土層	古代～中世	1.55×1.15×0.33	条痕文土器		17
SK068	G13	土壙	縦文	1.75×0.55×0.13	縦文土器		
SK069	H12	倒木痕	縦文晚期	2.5×2.4×0.31	条痕文土器		7
SK070	G12	焼土層	中世	1.15×1.05×0.19			
SK071	F11	土壙	縦文早期	1.8×0.85×0.31	石器(石匙) 焼石		6
SK072	F10	土壙	縦文早期	2.7×0.95×0.34	精円押切文土器		6
SK073	G12	土壙	縦文	1.35×0.4×0.45	縦文土器		
SK074	G13	土壙	縦文	1.5×0.55×0.38	安山岩(II)		
SK075	D12	円形焼土層	古代～中世	1.0×0.8×0.17	炭		
SK076	D11	土壙	縦文晚期	0.95×0.75×0.21	縦文(粗製深鉢)		
SK077	H12	土壙	縦文	1.8×0.9×0.35	ob(II)		
SK078	E12	土壙	縦文	1.2×0.25×0.05	縦文土器		
SK079	G11	炭窯?	古代～中世	6.35×1.75×0.35	炭		19
SK080	G10	焼土層	古代～中世	1.75×1.35×0.05			17
SK081	D13	焼土層	古代～中世	1.7×1.3×0.32	縦文(粗製深鉢・浅鉢) 安山岩(II) 炭		17
SK082	D11	焼土層	古代～中世	1.3×1.6×0.44			
SK083	D12	土壙	縦文	1.15×0.85×0.23	土師器(網) 安山岩(石織)		6
SK084	C8	土壙	縦文		ob(II)		
SK085	L16	焼土層	古代～中世	1.55×1.15×0.28			
SK086	L13	土壙	12C後～13C初	1.15×1.05×0.14	瓦器(箱) 土師器(碗?) SK57を切る		15
SK087	B14	焼土層	古代～中世				
SK088	L9	焼石土壙	近世				
SK089	L4	焼石土壙	近世				
SK090	K4	円形焼土層	古代～中世				
SK091	C9	土壙	縦文?		安山岩(II)		
SK092	F7	不整土壙	近世	2.7×1.1×0.12	土師器 SK32を切る		
SK093	G10	倒木痕	縦文晚期		縦文(鉢) 安山岩(II)		
SK094	G11	貯藏穴	縦文晚期	1.16×0.82×0.8			
SD001	溝		12C後～13C初		縦文(陶) 張生 土師器(井) 石青器(皿) 白磁(陶) 中陶(陶) 上端片門型 石器(石斧・石鍬) 鋸用 黒曜石 安山岩(II) 焼器 炭		12
SD002	溝		近世	2.5×0.8	土師器(井) 陶器(皿) 鐵器(刀)		
SB001	E6-7	獨立柱體物	12C後～13C初	7.8×3.85	土師器(不整・井) 石綱 安山岩(II) 炭		13

Tab. 2 2区遺構一覧

遺構番号	内寸	種別	時期	幅員/奥行き/深さ(単位)	主な出土遺物	備考	類別
SK001	O9	焼土層	中世	1.9×1.05×0.31	土師器(甕?) 炭		23

Tab. 3 3区遺構一覧表

遺構番号	内寸	種別	時期	幅員/奥行き/深さ(単位)	主な出土遺物	備考	類別
SK001	AC6	土壙	縦文晚期	1.05×1.0×0.19	条痕文土器		25
SK002	Y6	円形土壙	縦文晚期	1.65×1.6×0.13	縦文(浅鉢) ob(II) 安山岩(II) 石夷(II)		25
SK003	Z5	焼土層	中世	1.75×0.9+α×0.15	縦文(浅鉢) ob(II)		25
SK004	Aa5	土壙	縦文晚期	1.8×1.6×0.18	条痕文土器 ob(II) 炭		25
SK005	AC5	倒木痕	弥生前期	6.3×2.3×0.8	先痕文土器 弥生土器(甕)		25
SK006	Ae5	倒木痕	縦文晚期	4.0+α×2.8+α×0.5	縦文(陶) 土師器(井) 石器(陶) 黑色土器A(陶)		25
SD001	Ae5	溝	11～12C	0.35×0.15	縦文 張生(陶) 土師器(井) 石器(陶) 黑色土器A(陶) 瓦器(陶) 白磁(陶)		

付編：広瀬遺跡第1次調査に伴う自然科学分析

I. 放射性炭素年代測定

山形秀樹（パレオ・ラボ）

1. はじめに

広瀬遺跡第1次調査より検出された炭化材の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、G9グリッド4層より採取した炭化材1点、J10グリッド3層より採取した炭化材1点の併せて2点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定した¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

3. 結果

表1に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値25.0%）、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を曆年代に較正した年代を示す。

¹⁴C年代値（yrBP）の算出は、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

表1. 放射性炭素年代測定および曆年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}C$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を曆年代に較正した年代	
				曆年代較正値	1σ 曆年代範囲
PLD-2656 (AMS)	炭化材 G9グリッド 4層	-27.8	$2,375 \pm 35$	cal BC 405	cal BC 510 - 460 (47.3%) cal BC 450 - 440 (11.9%) cal BC 415 - 395 (33.7%)
PLD-2657 (AMS)	炭化材 J10グリッド 3層	-27.8	$1,285 \pm 35$	cal AD 690 cal AD 700 cal AD 710 cal AD 750 cal AD 760	cal AD 685 - 725 (52.6%) cal AD 740 - 775 (47.4%)

なお、曆年代較正の詳細は、以下の通りである。

曆年代較正

曆年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を曆年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年

代の比較、および海成堆積物中の構造の堆積構造を用いて¹⁴C年代と曆年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて¹⁴C年代を曆年代に較正した年代を算出する。

¹⁴C年代を曆年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3 (CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、曆年代較正値は¹⁴C年代値に対応する較正曲線上の曆年代値であり、 1σ 曆年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 曆年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および曆年代較正を行なった。曆年代較正した 1σ 曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の¹⁴C年代、p.3-20.
Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

II. 広瀬遺跡の花粉化石

鈴木 茂（パレオ・ラボ）

福岡市早良区大字西に所在する広瀬遺跡は室見川東岸の河岸段丘上（標高78～89m）に立地している。本遺跡において第一次発掘調査が行われ、縄文時代の集石炉や貯蔵穴、中世の溝などが検出され、縄文時代早期や晚期の土器、中世の土師器壊などが出土している。以下には発掘調査の際採取された土壤試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

1. 試料と分析方法

試料はG9グリッドの4層より採取された1試料である。土相はやや砂質の暗赤褐色粘土で、同層より放射性炭素年代 $2,375 \pm 35$ yrs BPが得られている（年代測定の節参照）。この1試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約4 g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレバーラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

2. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉10、草本花粉6、形態分類で示したシダ植物胞子2の総計18である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、その分布を図1に示した。なお、分布図は全花粉・胞子総数を基準とした百分率で示してある。また表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

検鏡の結果、得られた花粉化石数および分類群数とともに非常に少なく保存状態も悪かった。その中、樹木花粉ではシノキ属-マテバシイ属（以後シノキ類と略す）が最も多く、次いでコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ハンノキ属となっている。草本類ではイネ科が圧倒的に多く、出現率は50%弱を示している。その他カヤツリグサ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属、ヨモギ属を除く他のキク亜科が低率で検出されている。また単条型胞子が10%をこえる出現率を示している。

3. 遺跡周辺の古植生

先にも記したが得られた花粉化石数・分類群数共に少なく、これは花粉化石が土壤微生物などによって分解・消失してしまっている可能性が考えられる。よって遺跡周辺の古植生についてはおおまかな傾向を述べるに止めることとする。

年代測定から約2,300年前頃の遺跡周辺では、シノキ類を主体にアカガシ亜属を交えた照葉樹林が形成されていたのであろう。またコナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林も一部にみられたと推測され、これら樹木に絡まるようにティカカズラ属が生育していたと推測されよう。さらに河川部付近

には湿地林要素のハンノキ属も成育していたのである。一方草本類ではイネ科が多く、植物珪酸体分析結果をみるとヨシ属が多産しており、ウシクサ族もやや多く得られている。こうしたことから主に河川部と推測されるが、ヨシやツルヨシといったヨシ属が多く生育しており、土手などにはカヤツリグサ科、ナデシコ科、アブラナ科、シダ植物、ススキやチガヤなどのウシクサ族が生育していたと推測される。またウシクサ族にはオギも含まれ、このオギも生育していたことが考えられる。

表1 産出花粉化石一覧表

和名	学名	G9-4
樹木		
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	1
クマシデ属-アサガ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	3
ブナ属	<i>Fagus</i>	1
コナラ属コナラ亞属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	10
コナラ属アカガシ亞属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	5
シノノキ属	<i>Castanopsis - Fasania</i>	13
シナノキ属	<i>Tilia</i>	1
ツツジ科	<i>Ericaceae</i>	1
ティカカズラ属	<i>Trachelospermum</i>	1
草本		
イネ科	<i>Gramineae</i>	68
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	2
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	1
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	3
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	4
他のキク亞科	<i>other Tubuliflorae</i>	2
シダ植物		
単柔型胞子	<i>Monolete spore</i>	18
三条型胞子	<i>Trilete spore</i>	2
樹木花粉	<i>Arboreal pollen</i>	37
草木花粉	<i>Nonarboreal pollen</i>	80
シダ植物胞子	<i>Spores</i>	20
花粉・胞子总数	<i>Total Pollen & Spores</i>	137
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	4

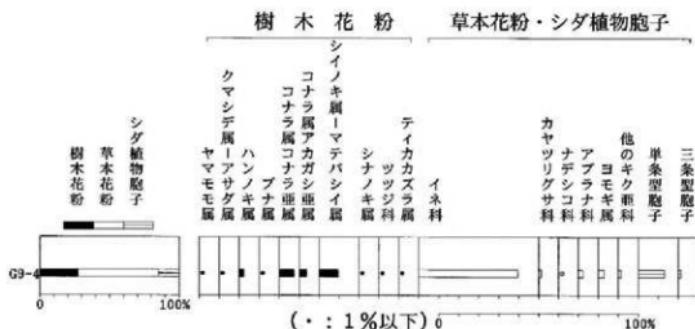
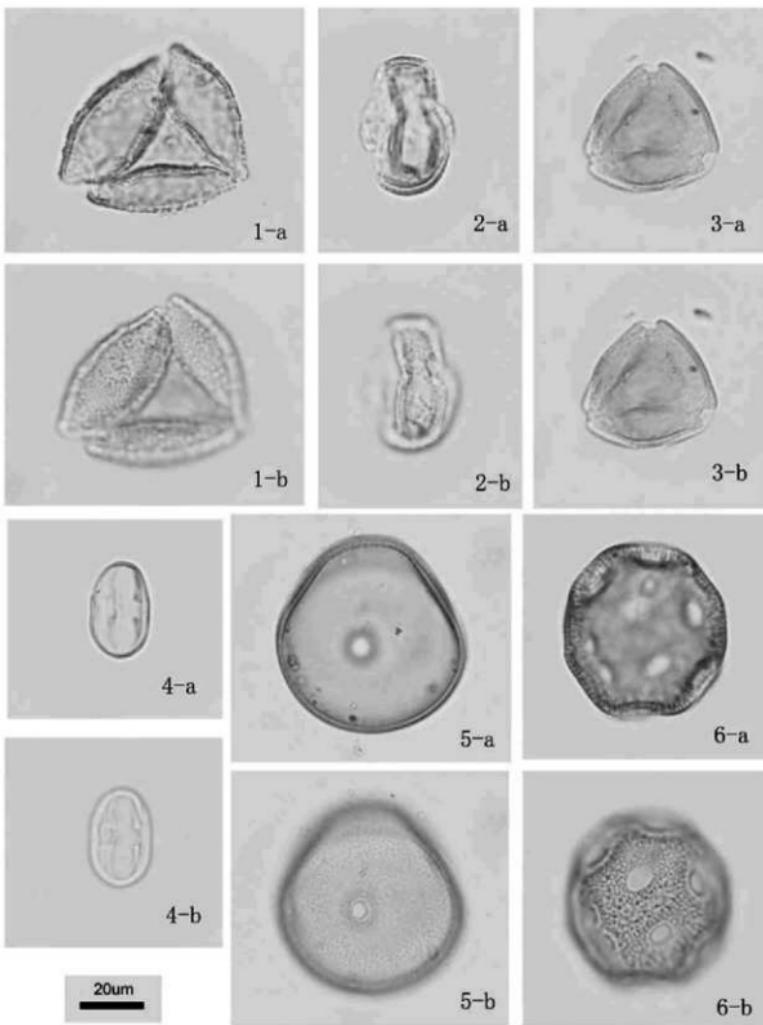


図1 G9グリッド4層試料の花粉化石分布図



図版 G9グリッド4層試料の花粉化石 (scale bar : 20 μm)

- | | |
|----------------------------|-------------------------------|
| 1 : コナラ属コナラ亞属 PLC.SS 3550 | 4 : シノキ属 - マテバシイ属 PLC.SS 3548 |
| 2 : コナラ属アカガシ亞属 PLC.SS 3552 | 5 : イネ科 PLC.SS 3551 |
| 3 : ヤマモモ属 PLC.SS 3547 | 6 : ナデシコ科 PLC.SS 3549 |

III. 広瀬遺跡の植物珪酸体

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積し形成された植物珪酸体（機動細胞珪酸体や單細胞珪酸体）については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。このような研究成果をもとに植物珪酸体分析から石釜広瀬遺跡周辺におけるイネ科植生について機動細胞珪酸体からの検討を試みた。

1. 試料と分析方法

分析用試料はG9グリッドの4層より採取した1試料である。土相はやや砂質の暗赤褐色粘土である。また同層より検出された炭化材について年代測定が行われ、補正年代2,375±35yrs BPが得られている（年代測定の節参照）。この1試料については以下のような手順にしたがって植物珪酸体分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスピーズ（直徑約40μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波モジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレバーラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスピーズが300個に達するまで行った。

2. 分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスピーズ個数の比率から試料1g当りの各機動細胞珪酸体個数を求め（表1）、それらの分布を図2に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、最も多く観察されたのはヨシ属で、約40,000個と生産量の少ないヨシ属としては非常に高い数値を示している。次いで約20,000個のウシクサ族、クマザサ属型となっている。

表1 試料1g当たりの機動細胞珪酸体個数

試料番号	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
G9-4	4,100	1,400	39,600	20,500	5,500

3. 遺跡周辺のイネ科植物

年代測定結果から、約2,300年前頃の広瀬遺跡周辺はヨシ属が多く生育しており、湿地や地下水位の高いところにヨシやツルヨシといったヨシ属の大群落が形成されていたとみられる。ウシクサ族もやや多く検出されており、先のヨシ原周辺の比較的乾いたところにススキやチガヤといったウシクサ族が草地を形成していたのである。またウシクサ族にはオギも含まれ、ヨシ原の周囲に生育していたことも考えられる。クマザサ属型がわずかながら検出されており、スズダケやミヤコザサといったクマザサ属型のササ類が遺跡周辺丘陵部に成立していた森林の下草の存在で生育していくことが推測される。

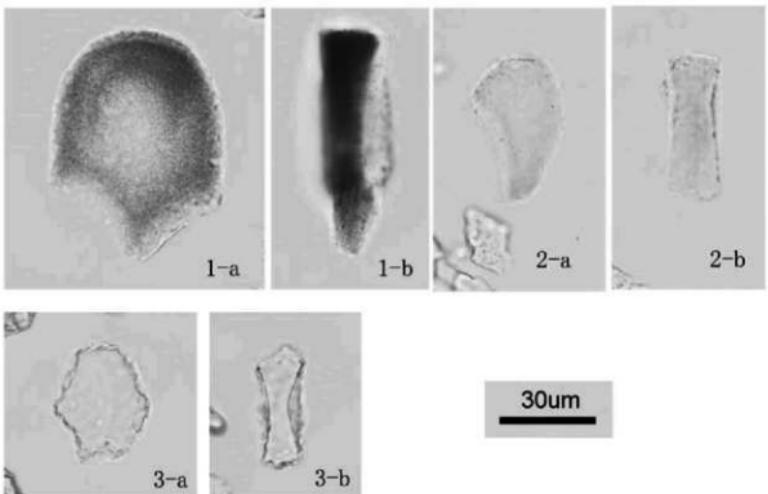


図1 G9グリッド4層試料の機動細胞珪酸体分布図

引用文献

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・佐々木彰 (1978) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (2) —イネ (Oryza) 属植物における機動細胞珪酸体の形状—. 考古学と自然科学, 11, p.9-20.



図版 C9グリッド4層試料の機動細胞球膜体 (scale bar:30 μ m)

- 1:ヨシ属 (a:断面、b:側面)
- 2:ウシクサ族 (a:断面、b:側面)
- 3:クマザサ属型 (a:断面、b:側面)

報告書抄録

ふりがな	ひろせ						
書名	広瀬遺跡						
副書名	広瀬遺跡第1次調査						
巻次	1						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	865						
編著者名	加藤良彦						
発行機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667						
発行年月日	2005. 03. 31						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
広瀬遺跡	福岡市早良区大字西、内野8丁目	40137	0800	33° 29° 23°	130° 20° 21°	20030616～ 20031226	6,243 基盤整備 促進事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
広瀬遺跡	集落	绳文 中世	居館 土器焼成 壙	押型文・燃糸 文土器 土師器・貿易 陶磁器	13世紀前後の環濠居館と同期の 土師器焼成壙		

広瀬遺跡 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第865集

2005年（平成17年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
 福岡市中央区天神1丁目8番1号
 (092) 711-4667
 印刷 ソウヤマ印刷
 福岡市博多区中呉服町10-5
 (092) 291-6160